

# 八世紀後半における中央ユーラシアの動向と長安仏教界

— 徳宗期『大乘理趣六波羅蜜多經』翻訳参加者の分析より —

中 田 美 絵

## The Buddhist Circle in Chang'an and the Movements amongst Central Eurasia during the Latter Half of the Eighth Century

—From the Study on Participants in Translation of *Dacheng Liqū Liu Boluomiduo Jīng*

大乘理趣六波羅蜜多經 during the Era of the Emperor 徳宗

NAKATA Mie

Central Asians from such areas as Sogdiana, Tokharistan and Kapisi started to move to the East due to the oppression by Islamic power which had gradually approached Eastern countries, and they finally came into the Tang China at the middle of the eighth century. Eunuchs who grasped political initiative in the Tang empire merged these immigrants from the Central Asia as well as non-Han people in Hebei, Hexi and Shuofang into the Imperial Guards which they controlled over in order to strengthen their military influence. In addition, there were non-Han people merged into the Buddhist circle in Chang'an, which had connected with eunuchs and the Imperial Guards. Under these circumstances, the eunuchs, the Imperial Guards and the Buddhism had been the receiver for non-Han people in Chang'an city, since the An Shi Rebellion. The translation of fan-ben 梵本 *Liu Boluomiduo Jīng* was operated by this group of people. In order to compete Tibet, Buddhist circle endeavored to outfit itself the newest Buddhist principle under the supports from eunuchs and the Imperial Guards. By so doing, it tried to offer the protection over the nation through magical power of the Buddhism in addition to that by the army through physical military force.

Moreover, the group of eunuchs and the Imperial Guards had won many Nestorians over to their sides since the An Shi Rebellion. The translation of hu-ben 胡本 *Liu Boluomiduo Jīng* which had operated before that of fan-ben reflected

such religious situations within the group of eunuchs and the Imperial Guards. With Luo Haoxin 羅好心 who was the representative of non-Han people in the Imperial Guards acted as the sponsor, they made Jingjing 景淨 from Nestorianism and Banruo 般若 work together for the translation. By so doing, they attempted to unify Nestorians and Buddhists under the Buddhism.

## はじめに

八世紀後半、唐朝の支持を背景に、不空 (s: Amoghavajra 705-774) や般若 (s: Prajñā 733?) ら密教僧の強力な主導のもと、仏教は長安を中心に隆盛期を迎えた。彼らの生み出した新しい仏教思想が空海ら渡唐僧によって日本にもたらされ、日本仏教に大きな影響を与えたことは周知の通りであるが、さらに、遼仏教への不空密教の影響力の大きさも指摘されている [藤原2009]。唐以降の日本を含むユーラシア北東部における仏教の基層において、不空や般若の思想が持つ重要性は明らかである。では、何故不空や般若の仏教はここまでの時間的・空間的な広がりを持つにいたったのか。それは、もちろん不空や般若が強調した「護国」的側面が時代の趨勢に合致したことによるのは謂うまでもないが、これに加えて、筆者は、不空・般若らの活動と八世紀中葉の中央ユーラシア世界にみられた政治・社会的変動とのかかわりに着目したい。

不空の長安仏教界における台頭は、安史の乱 (755-763年) 以降勢力を拡大した宦官たちと、彼らが率いる禁軍の支持によるところが大きい。すでに拙稿 [中田2007] で述べたように、これら宦官・禁軍勢力と不空ら仏教僧侶集団とは、ソグド人をはじめとする非漢族を多く包摂しながら、互いが混然一体となって成長したひとまとまりの集団であった。モンゴリアで東突厥が瓦解したことを契機に、その内部にいたソグド人や北方の諸民族が唐内地に流入し、ソグド系突厥の安祿山・史思明らの軍団がこれらを吸収した。さらに、両者が反乱を起こし鎮定された後は、半独立勢力たる河朔三鎮に軍事戦力として吸収されていく [森部2010]。このように、ソグド人の存在は唐後半期の情勢に大きな影響を与えた。一方、西アジアでイスラームの勢力が拡大し、その波が中央アジアにも及び、ソグド人をはじめとする諸集団の、唐やウイグル、吐蕃といった東方諸国への移動を加速させた。それにともない彼らの信奉するマニ教、景教 (ネストリウス派キリスト教)、仏教の文化は各地において花開くことになったと考えられる。同時期の長安における不空や般若ら主導のもとでの仏教隆盛も、そして宦官・禁軍勢力と不空ら仏教勢力下への非漢族の流入も、上述のような中央ユーラシア全体を巻き込んだ動向と無関係であるはずはない。不空や般若の活動時期の仏教の隆盛の要因は、こうした動向のもとで移動する

人々に着目することでより一層明らかになると考える。

本稿では、般若による『大乘理趣六波羅蜜多經』（以下『六波羅蜜經』と略）翻訳事業をとりあげ、どういった中央ユーラシア情勢のもとで実施されたのか、そしてそこには流動する諸民族・諸宗教勢力の動向とからんで、いかなる人脈面のかかわりがみられるのかを検討したい。それは八世紀終わりに行われた本經典の翻訳事業が、先に述べてきた八世紀の中央ユーラシアの動向全体との関連を語るうえで最適な事例であるからである。しかも、『六波羅蜜經』には梵本以外に「胡本」なるものが存在し、景教僧侶が翻訳に参加していた。このことは、当時の長安仏教界が中央ユーラシア世界の動向と無関係でないことを示唆している。般若の活動に軸を置きつつ、景教僧侶の参加という事実も手がかりに、八世紀後半における長安仏教界を支えた人脈の特徴を述べてみたい。

## 第一章 『大乘理趣六波羅蜜多經』翻訳と宦官・禁軍勢力

### (1) 宦官・禁軍体制の復活までの概観

唐後半期における仏教事業を積極的に推進したのは主に宦官とそれが率いる禁軍勢力と呼ぶ一群の集団であったが、本稿が取扱う貞元四（788）年の『六波羅蜜經』翻訳の時期までに、この集団は一度政治的な風波にもまれたのちに巻き返すという過程を経ている。まず、この過程を整理しておきたい。

唐の中央政界では当初、安史の乱を契機に、李輔国、程元振、魚朝恩といった有力宦官が禁軍（北衙禁軍ならびに神策軍）<sup>1)</sup>を掌握し専権を振るうようになった。さらに、長安仏教界を統括する功德使は、宦官配下の禁軍将軍である李元琮や宦官李憲誠をはじめとする禁軍の実権者や有力宦官によって占められており、仏教界は宦官・禁軍勢力の支配下に置かれていた。

ところが、大暦五（770）年に宦官魚朝恩が殺害されてからは、一人の宦官に権力が集中することを防ぐため、代宗は禁軍の統帥には武将や文吏をあて、宦官の権力を抑制する方策を打ち出した。建中元（780）年に即位した徳宗もその方針を受け継ぐとともに、功德使と宦官・禁軍との結びつきを断ち切り、天下寺観のことはすべて祠部に帰せしめることになった〔塚本1933（1975：261-262）〕。

しかし、まもなく転機が訪れる。徳宗の政策は河朔三鎮や平盧・淮西などの藩鎮の権力削減に及んだが、これが反乱を招くにいたる。さらに、反乱鎮圧の援軍となるはずであった涇原節

1) 神策軍は本来は辺境軍であったが、安史の乱で魚朝恩に率いられるようになり、その活躍により禁軍に昇格し、次第に禁軍の中でも突出した軍隊になっていく。本稿では便宜上、禁軍とするときは北衙禁軍および神策軍を一括して呼ぶ。

度使が背いて長安を占拠し、朱泚が皇帝を称するにいたり、徳宗は奉天に身を寄せざるを得なくなった<sup>2)</sup>。そして、朔方節度使の李懷光も背いて朱泚側に就くなど、大反乱へと発展していく。

これが、宦官・禁軍にとって、徳宗の支持を獲得し、再び政権中枢に返り咲く絶好のチャンスとなった。神策軍及び宦官は、朱泚の乱の平定のために尽力し、鎮圧に成功する。徳宗はこれを機に宦官を重用し始め、興元元（784）年十月、宦官竇文場・王希遷をそれぞれ監神策左右廂兵馬使とし、禁軍の指揮権を再び宦官に委ねる。そして、貞元二（786）年には、神策軍左右廂が、左右神策軍と改められ、大將軍以下の將官が設置され、神策軍は制度的に整えられていった。

仏教に対する方針も、即位時のそれからは大きく転換され、貞元二年には徳宗皇帝自ら「菩薩戒」を授かり〔『宋高僧伝』巻16「唐京師章信寺道澄伝」；Weinstein1987：95〕、貞元四年には、長安に左右街功德使を設けており〔塚本1933（1975：273-274）；Weinstein1987：95-96〕、それぞれ神策軍トップの宦官王希遷・竇文場が任命され、仏教界の統括権は完全に宦官の手に帰すこととなった。

ここに宦官のトップ二人が禁軍の中核たる神策軍と仏教界の統括者たる功德使の両方を兼ねるという、唐末まで続く体制が完成する。『六波羅蜜經』翻訳事業はこのような状況下ですすめられたのであり、徳宗期の最初の本格的な仏教事業と位置づけられる。次に、この翻訳事業がどのように進行され、どういった人的構成のもとに実施されたのかをみてみよう。

## (2) 『六波羅蜜經』翻訳事業の経過と参加者

### a. 『六波羅蜜經』翻訳事業の経過

徳宗期には、二度にわたって一切経目録が編纂された。それらは、『続開元釈教録』（以下『続開元録』）、『貞元新定釈教目録』（以下『貞元録』）である。『六波羅蜜經』は『続開元録』巻上・中と『貞元録』巻17に収録され、そこには『六波羅蜜經』翻訳に至るまでの経緯、および經典翻訳事業に関わる法会等を実施するまでの過程が記されている（表1参照）。これらに基づき翻訳事業の大まかな経過を整理すると、次の①～⑤のようになろう。

- ① 【仏教僧と景教僧の協力による翻訳】：般若と共に『六波羅蜜經』（梵本）が広州に漂着。般若は、母方のいところで神策軍下の羅好心と長安で再会。羅好心は、般若と景教僧の景浄に「胡本」の『六波羅蜜經』の翻訳を行なわせた。完成後、徳宗は天下への經典の流布を認めなかった。
- ② 【仏教僧による翻訳】：貞元4年4月19日に勅が下り、般若を中心に仏教僧侶だけで、「梵

2) 徳宗期の藩鎮政策及びその失敗による藩鎮の跋扈の状況については、日野1974（1980：95-98）を参照。

表1 『大乘理趣六波羅蜜多經』 翻訳事業の経過

年月日	事業内容	続開元録	貞元録17
建中2～3 (781～782)年	般若、広州に漂着。度重なる災難により、持参した梵夾はすべて紛失したが、竹筒に入った『大乘理趣六波羅蜜多經』だけは、浜辺にうちあげられ無事であった。	上、756頁 a	891頁 c
貞元2年	般若、「郷親」羅好心のもとを訪れる。	上、756頁 a	892頁 a
貞元3年?	羅好心は般若に請うて、波斯僧景浄と「胡本六波羅蜜」をもとに翻訳させ、七巻とする。完成後、徳宗に經典の流布を求めるも、認められなかった。	上、756頁 a	892頁 a
貞元4年 4月19日	中書門下牒が王希遷に下り、「有行僧」を選び西明寺にて「梵本」にもとづいて翻訳するように命じる。ついで祠部にも牒し勅に従うように命じる。最後に、京城諸寺大徳にも牒文をまわし、状況を知らしめた。	上、756頁 b	892頁 a
6月8日	経題より翻訳開始。 街西功德使王希遷は繪旨を奉じ孟渉、馬有麟等とともに「梵本經」を西明寺に送る。宮廷より出發し、芳林門を出る。車騎は天衢（王都）に満ち、士女は閭里にあふれた。 錢・茶・香を賜い訳経院を供養する。 開題して「大乘理趣六波羅蜜多經」と名づける。	上、756頁 b	892頁 b
8月6日	勅旨が下り、訳経院に茶・香を賜る。		892頁 b
8月24日	翰林使張孝順が勅旨を宣し、翰林院待詔官等は毎月假日に二度西明寺において翻経僧利言らを禮謁するよう命が下る。		
8月29日	翰林学士左散騎常侍帰崇敬・金部郎中呉通微・水部郎中徐岱・京兆醴泉縣承王丕等はともに訳場にやってくる。贍禮する。		
9月20日	待詔徐承嗣・郭紹・楊絢・楊季炎等二十餘人は供を設け訳を観る。		
10月中旬	翻訳終了。	上、756頁 b	
11月15日	繕寫終了。		
11月28日	西明寺良秀、光順門に詣り、表を奉じ、翻訳經典を進め、御製の序作成と、「開元目錄」への入録を請う。慰勞の勅旨が下り、禁中にて齋食を設ける。（『続開元』は良秀の上表文省略。）	上、756頁 b ～ c	892頁 b～c
	良秀上表し、12月1日に、「国の為に」無遮大齋を西明寺で実施し仁王經を転誦するよう請う。墨勅が下り認可される。		892頁 c
	般若等に賜与。般若上表し、感謝の意を述べる。	上、756頁 c	893頁 a
	「訳経施主」の羅好心、上表し感謝の意を述べる。皇帝の批答文。	上、756頁 c ～757頁 a	893頁 a～b
	右街功德使王希遷、奉じて進止（=聖旨）を宣し、西明寺良秀に『六波羅蜜經』の疏を作成するよう命じる。	中、762頁 c	
12月2日	王希遷、勅を奉じ、醴泉寺の僧思惟に対し宣し、同寺の院に罽賓国の進めた「梵本六波羅蜜經」と般若を配属させた。	上、757頁 a	893頁 b
12月23日	右神策軍判官内謁者監馬馮國清、勅を受け、宣し、般若の院に賜与。		
貞元5年 2月4日	進経日（昨年11月28日）に恩旨を奉じ進上することになっていた『六波羅蜜多經』中の「真言契印法門」の唐梵相對の繕寫が終了し、良秀等進上。	上、757頁 a	893頁 b
4月15日	少監馬欽淑、奉じて進止を宣し、醴泉寺超悟に千福寺で『六波羅蜜經』を講じ、兼わせて疏を修めるよう命じた。	中、763頁 a	
	少監馬欽淑、聖旨を奉じ宣し、章敬寺の智通・道岸らに疏義を編纂させる。	中、764頁 a	
5月4日	「御製六波羅蜜經序」を経首にする。そして勅により、千福・章敬寺に經を一本賜い、転読させ、「流行」させる。千福・章敬寺の惟雅・智柔上表、感謝の意を述べる。	上、757頁 b	
7月1日	西明寺寺主良秀等、完成した疏と上表文を右街功德使王希遷に付し進上。そのなかで、さらに疏義を作成中の沙門談筵に西明寺にて「讀演」させ、「中外」に流布させるよう請う。	中、762頁 c ～763頁 a	

年月日	事業内容	続開元録	貞元録17
7月15日	醴泉寺超悟、疏を修め、状進。それに対する徳宗の批答文。修疏僧の良秀や超悟らに絹を賜与する。	中、763頁 a ～b	
	醴泉寺超悟は、上表し、賜与に対する感謝の意を述べる。さらに、超悟は、六波羅蜜経院の勅額を醴泉寺に置き、さらに僧侶を選んで講を開くように請う。	中、763頁 b	
7月19日	超悟の上奏を受けて、中書門下より命が下り、醴泉寺に国の為に六波羅蜜経院を設置し、僧7人を選び常に講習させることに。	中、763頁 c	
7月23日	右銀台門にて中使張孝順が勅を奉じて宣し、六波羅蜜経院額を賜り、宝車に載せ、皇城を巡り醴泉寺へ運ぶ。	中、763頁 c	
7月24日	醴泉寺沙門超悟、六波羅蜜経院設置に対し上表、陳謝。	中、764頁 a	
9月8日	章敬寺沙門智通・道岸は貞元5年4月15日の詔により『六波羅蜜経』の疏義・疏義例訣・疏義目録を作成し、上表文とともに進上。	中、764頁 a ～b	
9月16日	章敬寺智通・道岸に賜与。智通・道岸は、醴泉寺にならって一寺一院に大乘理趣経院を設け、7人の僧を置き、講誦することを請うた上表文を左衛門徳使竇文場に附す。	中、764頁 b ～c	

注1：『続開元録』と『貞元録』ともに一部を除き同記事からなるが（～貞元5年2月4日）、本經典の疏や疏義の作成にかかわる記事（貞元5年4月15日～9月16日）については、『貞元録』には掲載されていない。

注2：『六波羅蜜経』本文は各寺院の僧侶が西明寺に結集して合同で翻訳したが、『六波羅蜜経』の疏と疏義については、西明寺（貞元4年11月28日、翌年7月1日）、醴泉寺または千福寺（貞元5年4月15日）、章敬寺（貞元5年4月15日）に勅命が下り、それぞれ個別に作成したことが分かる。

本」から翻訳させることになる（→表2）。6月8日、宮中から梵本の『六波羅蜜経』が運び出され西明寺に送られる。11月15日に翻訳終了。

- ③【翻訳献上～法会の実施】：翻訳經典を徳宗に献上。ここで、良秀の上表により、徳宗による御製の序文の作成と、「国の為」に西明寺で無遮大齋を行い、『仁王経』の転読が決定する。さらに般若や羅好心が謝意を表す上表を行なう。この後、西明寺良秀には疏を作成させ（翌年7月1日に終了）、また、醴泉寺には本經典の梵本を置かせ、さらに本院に般若が配属される（12月2日）。
- ④【諸寺院での「疏」「疏義」作成と、法会の拡大】：貞元5年、長安西街の醴泉寺・西明寺・千福寺、城外の章敬寺は、それぞれ『六波羅蜜経』の「疏」や「疏義」の作成を命ぜられる。また各寺院で『六波羅蜜経』の講を開いたり、転読などが実施される。醴泉寺には、六波羅蜜経院の勅額が賜与され、ここで常に講習させることが決定する。
- ⑤【一寺一院に六波羅蜜経院設立を求める】：同年9月、章敬寺沙門智通らは、醴泉寺にならいい、一寺につき一院を六波羅蜜経院（「大乘理趣経院」）に充て、『六波羅蜜経』の講誦を願い出た（認可されたかどうかは不明）。

## b. 梵本『六波羅蜜經』翻訳事業の参加者

## i. 僧侶の構成

表2は、梵本による『六波羅蜜經』翻訳に参加した僧侶のリストである。列位トップは、般若(①)である。般若は、罽賓国すなわちカーピシー<sup>3)</sup>の出身で、俗姓は喬苳摩(ゴータマ)、母方は羅姓であるという[『貞元録』巻17:894下]。七歳で発心し、『阿含經』を学び、次に迦濕蜜(カシミール)では有部等の小乗系仏教を、中天竺那蘭陀(ナーランダ)では大乘仏教の諸學問を学び、その後、南天竺で密教を体得したという。以上の修行を経た後、文殊菩薩の住む中国に赴いて仏法を広める決意をし、苦難の渡航の末、建中二(781)年広州に漂着し、翌三年に長安に入ったという。この般若を除くと、ほとんどが不空門下の僧侶で(不空は既に死去)、代宗期の『仁王經』などの翻訳事業や長安城の化度寺での講經など、不空の指示による仏事に関わった人物が多い[岩崎2002:22-23]。なかでも②利言、④道液、⑦応真、⑧超悟は、不空とともに

表2 『大乘理趣六波羅蜜多經』訳場列位(『統開元録』上:756b;『貞元録』17:892a)  
※太字ゴシックは、かつて不空の仏教活動にも関わっていた僧侶。

所属寺院 名前	役割	備考(『代宗朝贈司空大辨正広智三藏和上表制集』;岩崎2002:表1)
①罽賓三藏沙門般若	宣訳梵本	罽賓国出身。建中二年来唐、貞元二年に長安に至る。翻訳終了後、醴泉寺に配属される。
②翰林待詔光宅寺沙門利言	訳梵語	クチャ出身。不空が涼州で節度使哥舒翰のもとで訳經をしているとき、安西から招かれ、不空に協力する。その後、代宗大暦年間には醴泉寺に配属され、さらに不空の指示で長安化度寺の念誦僧になった。
③西明寺沙門圓照	筆受	『表制集』『統開元録』『貞元録』の編纂者。
④資聖寺沙門道液	潤文	不空の『仁王經』『虚空藏經』『文殊師利菩薩佛利功德莊嚴經』翻訳に参加。
⑤西明寺沙門良秀	〃	
⑥莊嚴寺沙門圓照	〃	
⑦慈恩寺沙門応真	証義	不空の『仁王經』翻訳に参加。
⑧醴泉寺沙門超悟	〃	不空の『仁王經』翻訳に参加。また、不空の指示で化度寺で講を開く。『六波羅蜜經』を、千福寺において講經。
⑨光宅寺沙門道岸	〃	代宗大暦年間には不空の指示で長安化度寺での念誦僧になった。『六波羅蜜經』翻訳後、章敬寺に移る。
⑩西明寺沙門警空	〃	

3) 罽賓国は、時期によって指す地域が異なるが、唐の時期はカーピシー～カーブル～ガンダーラ地方を指す。『貞元録』巻17で、般若の出身地「罽賓」を『大唐西域記』巻1にみられる「迦畢試國」つまりカーピシーであると紹介している。

に訳経事業を行っていることから、訳経のトップが不空から般若にかわったということを除き、ほぼ代宗期の不空の訳経集団が受け継がれていたことになる〔岩崎2002：23-24〕。

## ii. 翰林待詔の参加

次に世俗の参加者を見てみたい。まず、以下の史料（表1：貞元4年8月24日～9月20日）から翰林待詔が大きくかかわっていたことがわかる。

（八月）二十四日に至り翰林使張孝順は奉じて勅旨を宣するに、翰林院待詔官等は宜しく命じて毎月假日に兩度西明寺に於て翻經僧利言等を禮謁し、事了りし日に停むべしと。二十九日に至り翰林学士左散騎常侍歸崇敬・金部郎中吳通微・水部郎中徐岱・京兆醴泉縣承王丕等は同に來りて瞻禮す。九月二十日に泊び待詔徐承嗣・郭紹・楊絢・楊季炎等二十餘人は設供し觀訳す。〔『貞元録』卷17、892b〕

8月24日に翰林使の張孝順を通じて、毎月假日に翰林院の待詔官等は二度西明寺で翻譯中の利言らに謁見せよとの詔が傳達された。このとき利言自身も翰林待詔であるので（表2-②）、同僚からの禮謁を受けることになる。29日には翰林学士が利言ら翻經僧を拜礼し、9月20日には徐承嗣をはじめとする翰林待詔の二十餘人が西明寺に集まり僧侶らを供養し、さらに經典を「觀訳」したという。これは、翌10月中旬には翻譯が完全に終了することから、ここで翰林待詔らの翻譯文のチェックが行なわれたのであろう。

翰林院は玄宗開元初期に宮中に設立され、次第に職掌内容に応じて翰林学士院と翰林待詔院の2つに分かれていったとされる。翰林学士は他の官庁からは全く独立した天子直属であり、しだいに中書舍人をさしおいて詔勅の起草をするなど中央行政の運営に大きな影響力を持つようになった。いっぽう、翰林待詔は書・画・琴・棋・医・天文・五行・僧道などの才芸に長けた人物が選ばれた。不空や般若に関わる人物にも翰林待詔になった例はみられる。例えば、不空の行状を記した俗弟子の趙遷（「前試左領軍兵曹參軍翰林待詔」〔大唐故大德贈司空大辨正廣智不空三藏行狀〕）や、安史の乱以前から不空と活動を共にした梵語などに長けたクチャ出身の利言（表2-②）などが挙げられよう。また、『大方廣仏華嚴經』四十卷（以下、『四十華嚴』と略）の題名訳出のメンバーのなかに「翰林供奉光宅寺沙門智真」の名前を確認できる<sup>4)</sup>。このように長安仏教勢力は、内廷の宦官と結びつくだけでなく、翰林待詔として、自らも内廷に進出していたことがうかがえる。

4) このとき、智真は「翰林供奉」であるが、中晩唐の翰林供奉は一般に翰林待詔を指すという〔頼2003：317〕。実際に、『守護国界陀羅尼經』の翻譯列位では、智真は、「翰林待詔」として記されている。



## iii. 神策軍の参加

翰林待詔以外で本經典の翻訳・法会にかかわった世俗の人物は表3のようになる。a～dは皆な神策軍に属していることがわかる。bの王希遷は、内侍省の宦官で、当時の右神策軍の統括者であり、かつ長安城の街西の諸寺院を管轄する功德使でもあった。全員が「右」神策軍の所属であるのは、經典の護送先の西明寺をはじめ、法会を実施した寺院がほぼ街西に位置し、それを担当するのが街西功德使であるから、王希遷とその下の地位にある右神策軍大將軍二人が参加したのであろう。

a 羅好心は「訳経施主」として、翻訳事業を全面的にバックアップした本事業の中心人物である。羅好心は般若の母方（羅姓）の兄弟の子に当たり、自らはその出身を「西蕃」と述べているが〔『続開元録』上：756c；『貞元録』17：893a〕、羅姓であることからみて、トハリスタンか、般若と同じ罽賓国出身であろう（後で詳述する）。肩書きの「奉天定難功臣」は、『新唐書』卷50志40兵・禁軍に、「自德宗幸梁遷，以神策兵有勞，皆號興元元從奉天定難功臣」とあるように、朱泚の乱鎮圧で活躍した神策軍兵士に与えられた称号である。德宗は朱泚の乱で長安を逃れ奉天、梁州（興元元（784）年に興元府）に移るが、このとき、德宗を守護し、反乱を鎮圧したのが神策軍であった。ここから、羅好心は朱泚の乱鎮圧に協力していたこと、また、この反乱以前には来唐し、神策軍に入っていたということがわかる（移住時期は後述）。

b 王希遷には「興元元從」、c 孟渉には「奉天定難功臣」の肩書きがあることから、彼らは共

表3

	名前	肩書き	役割	典拠
a	羅好心	右神策馬軍十將・奉天定難功臣・開府儀同三司・ 檢校太子詹事・上柱国・新平郡王	訳経施主	『続開元録』卷上、p. 756c；『貞元録』17、p. 893a
b	王希遷	勅街西功德使・兼勾當右神策軍使營幕使・元從・ 興元元從・鎮軍大將軍・行右監門衛將軍・知内侍 省事・上柱国・太原縣開国伯	經典護送	『続開元録』卷上、 p.756b；『貞元録』17、 p. 892a～b
c	孟渉	奉天定難功臣・驃騎大將軍・行右神策軍大將軍・ 知軍事・檢校工部尚書・兼御史大夫・上柱国・武 都郡王	經典護送	『続開元録』卷上、 p.756b；『貞元録』17、 p. 892b
d	馬有麟	宝応功臣・元從・驃騎大將軍・行右神策軍大將軍・ 知軍事・兼御史中丞・上柱国・静戎郡王・食実封 五十戸	經典護送	『続開元録』卷上、 p.756b；『貞元録』17、 p. 892b

に、羅好心と同様、朱泚の乱鎮圧にあたった功臣である<sup>5)</sup>。c 孟涉は、朔方節度使李懷光の部将であったが、途中で懷光が反乱軍側に寝返ったため、自らはそれに背いて神策軍の李晟のもとに赴いた〔『舊唐書』卷121李懷光傳；『新唐書』卷224上、李懷光傳；『舊唐書』卷133李晟傳；『新唐書』卷154李晟傳など〕。いっぽう、d 馬有麟の肩書き「宝応功臣」は、肅宗朝末期に皇后らがクーデターを起こしたときに、皇太子（のちの代宗）を守護して活躍した宦官率いる射生軍の兵士が、代宗即位後に賜った称号である〔中田2007：51〕。よって馬有麟もまた、代宗期から射生軍に入って宦官のもとにいた武人とみられ、その後神策軍の大將軍に昇進したのであろう。

さらに、b 王希遷以外にも、「興元元從」は仏教界で重要な役割を担っていた。それは、やはり般若を中心として実施された貞元十一～十四（795～798）年の『四十華嚴』の訳場に参加し、翻訳が終了した經典を徳宗に進上した次の人物から確認できる（『貞元録』17：895b）。

右神策軍護軍中尉・兼右街功德使・元從興元元從・雲麾將軍・右監門衛大將軍・知内侍省事・上柱國・交城縣開國・食邑三百戸・臣霍仙鳴

左神策軍護軍中尉・兼左街功德使・元從興元元從・驃騎大將軍・行左監衛大將軍・知内侍省事・上柱國・邠國公・食邑三千戸・臣竇文場等進

霍仙鳴・竇文場はともに宦官であり〔『旧唐書』卷184宦官；『新唐書』卷207宦者上〕、それぞれ『四十華嚴』翻訳時には、右・左神策軍のトップに当たる護軍中尉になっている。両者共に「興元元從」であることから、朱泚の乱鎮圧に当たった功臣である。また、この『四十華嚴』翻訳のために、太原にいる沙門澄観に長安での翻訳参加の命が下るが、これを伝達し、澄観を長安へ連れて行く命を受けたのは宦官李輔光であった〔『宋高僧伝』卷5「唐代州五臺山清涼寺澄観伝」〕。李輔光の墓誌によると、彼も「興元元從」であり、朱泚の乱鎮圧に協力していた<sup>6)</sup>。このように、当時の長安仏教界は神策軍の「興元元從奉天定難功臣」に支えられていたことは明らかである。しかも、この「興元元從奉天定難功臣」に対して、宰相機関である中書、監察機構である御史府、軍事行政機関である兵部が、彼らの兵籍を掌握することも管理することもできなかったとされており〔張1994：129；『新唐書』卷50兵志：1334〕、彼らは政府の管理機構から独立した状態にあったといえる。こうしたことが神策軍のみならず、それを率いる宦官の勢力拡大につながった

5) 『旧唐書』卷139、陸贄伝3797頁に、「徳宗至梁、欲以谷口已北從臣賜號曰「奉天定難功臣」、谷口已南隨扈者曰「元從功臣」とあるように、「奉天定難功臣」に対し、谷口（醴泉県）より南の梁州（興元府）で徳宗に付き従ったものは、「元從功臣」とよばれた。「興元元從」はこの「元從功臣」を指すのであろう。

6) 『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編』第29；『全唐文』卷717崔元略「唐故興元元從正議大夫内侍省知省事上柱国賜紫金魚贈特進左武衛大將軍李公墓誌銘并序」。本墓誌を釈読したものとして、高瀬2009：211-217がある。また、『四十華嚴』の訳場列位や翻訳事業参加者については、中田2010で紹介しているので、そちらを参照されたい。

ことはいうまでもない。

以上から、「興元元從奉天定難功臣」である宦官や神策軍の武人が『六波羅蜜經』翻訳の主催者であり、さらには徳宗期の長安仏教界を支えていたことがわかる。これは、代宗期にみられた仏教勢力と宦官・禁軍勢力との協力体制が徳宗期においても継続されたことを物語っている。では、仏教勢力と宦官・禁軍勢力は何故『六波羅蜜經』を翻訳しようとしたのか。本經典の構成、および翻訳の時代背景から述べてみたい。

### (3) 『六波羅蜜經』翻訳の目的

#### ① 『六波羅蜜經』の構成

まず、梵本にもとづき漢訳された『六波羅蜜經』という經典がいかなる性格であるのかについて整理しておこう。『六波羅蜜經』には、仏教修行者が悟りを開くための過程と、その実践方法である六波羅蜜とが記述されている。六波羅蜜とは、般若經典に説かれる大乘仏教における菩薩に課せられた実践徳目のことで、菩薩はこの六徳目を得て自利利他の大行を究竟し、涅槃の彼岸に到るとされる。このことから、『六波羅蜜經』は般若經典として分類されることもある。

ただし本經典で注意すべきは、現存する『六波羅蜜經』は、梵本から翻訳されたことになっているが、実は中国撰述の可能性が高いという点である。訳語の不統一なども多く、月輪氏は、「この經の訳は実は訳場の合作のようである」とし、偽作つまり中国撰述とみる〔月輪1971：527-531〕。頼富氏も同様に、『六波羅蜜經』は、雑多な教義の集成で、大小乗諸經典からの影響、もしくは引用と思われるものが多いとし、中国撰述の可能性を否定しない〔頼富1979：35〕。ただし頼富氏は、その内容からみて、底本らしきものが存在し、底本をもとに改変・挿入されたものであることを指摘する。その底本とは、『大方等大集經』の「無尽意菩薩品」（以下「無尽意」）の系統を引くものであるという。この「無尽意」系統の原本を底本とする箇所は、『六波羅蜜經』第二品「陀羅尼護持国界品」の前半部分と第五～十品である。『六波羅蜜經』の残りの第一品、第二品後半、第三～四品は「無尽意」とは無関係の内容であるという。すなわち、『六波羅蜜經』の第二品前半と第五～十品が「原型」と呼べる箇所であり、それに対し、第一品、第二品後半、第三～四品は原本となるテキストがあるわけではなく、後から付加されたものとみられるという〔頼富1979：41-53〕。

さらに、『六波羅蜜經』には、密教色が濃いという特徴がある。それは特に第二品の「陀羅尼護持国界品」の後半部分に顕著に表れる。第二品の「陀羅尼護持国界品」の前半は、不問世界に関して説かれ、この記述は、「無尽意」の最初の部分と同内容であるという。ただし、「無尽

意」のほうでは、不眇世界に続いて六波羅蜜の各々の説明に移るのに対して、「陀羅尼護持国界品」では、不眇世界のあとに六波羅蜜の説明が続くのではなく、がらりと内容が変わり、諸尊の真言陀羅尼などがとかれ、金剛頂系の密教が強く表れるのである。六波羅蜜の内容は、ずっと後の第五品まで説かれぬ。この第二品後半は、とくに密教的性格が強く、真言陀羅尼の念誦によって、本經典を受持する者や国界の守護が強調されるなど護国要素を多く取り込んでいる〔頼富1979：45-49〕。このため「陀羅尼護持国界品」だけに注目すると、『六波羅蜜經』は護国要素の強い密教經典と見ることも可能とされる〔頼富1979：52〕。

以上をまとめると、『六波羅蜜經』は、(i)悟りへの過程と、その具体的実践方法である六波羅蜜を説いたもの、(ii)衆生と国土を守護するための真言陀羅尼の念誦を推奨したもの、ということになる。なかでも、(ii)は唐朝で特に重視されたとみられ、この陀羅尼の部分に関して徳宗は『六波羅蜜經』翻訳終了後に、「再び六波羅蜜經中の真言契印法門を訳さしめ、唐梵の相対を進来せしめよ」〔統開元録〕上、757頁a：『貞元録』17,893頁b〕と命を下し、僧侶らに『六波羅蜜經』の真言・契印だけを抽出し、漢語と梵語の対照表を提出させるなど、『六波羅蜜經』の真言陀羅尼の効能に大きな期待を寄せていたことが分かる。

## ②対吐蕃政策と『六波羅蜜經』翻訳

『六波羅蜜經』に限らず、般若訳の經典は、必ずどこかで護国思想が強調され、さらにその箇所はおおむね後から挿入された形跡が強うかがえるという〔頼富1979：47〕。とすれば、そういった思想は、いうまでもなく訳場で「翻訳」に携わった僧侶らの思想が大きく影響する。岩崎氏が指摘するように訳経集団が不空のときとほぼ同じであることを考えれば、彼らが不空の護国思想を受け継ぎ、翻訳時の政治・社会情勢をふまえた上で、經典を「翻訳」していったとみることができる〔岩崎2002：19-24〕。さらには、經典翻訳の施主たる羅好心や訳場に参加した宦官や翰林待詔の思惑も大きく影響したはずである。

では、仏教勢力及び神策軍の羅好心や宦官らはいかなる目的をもって『六波羅蜜經』翻訳事業にのぞんだのだろうか。本經典の持つ「護国」の性格に注目して検討してみよう。「護国」との関連で当時の唐朝を取り巻く情勢を考えたとき、国内の藩鎮勢力の伸張という問題もあろうが、なんととっても、安史の乱以降勢力を伸張し唐を圧迫し続ける吐蕃の存在は無視できなかったはずである。吐蕃によって河西・隴右が陥落し、長安が一時占領されるなど、唐は常にその脅威にさらされ続けた。建中四（783）年に吐蕃と唐はいったん会盟を結ぶものの、わずか数年後の貞元二（786）年頃には吐蕃の侵入が再び激化し、貞元三年には会盟と偽って唐を攻め、両国の関係はさらに悪化していった〔佐藤1959：608-611、637-651〕。

そこで宰相李泌は、吐蕃への対抗策として、ウイグル・雲南・大食・天竺と和親を結ぶように徳宗に提案する。徳宗はウイグルの可汗に対する積年の恨みからウイグルと手を結ぶことには消極的ではあったが、李泌はそれを説得し、四方から吐蕃を封じ込める策をとる〔『資治通鑑』巻233貞元3年秋条〕。つまり、貞元四年頃にはじまる『六波羅蜜經』翻訳は、まさしく対吐蕃に向けて唐とその周辺諸国とが協力体制をとるタイミングで実施されたのである。そして、都の長安を守護する任務を担っているのは、他でも無く神策軍を頂点とする禁軍である。禁軍が吐蕃に対抗していくために、物理的な軍事力にプラスして、「新兵器」としての護国經典を必要とした。そこで、仏教事業を任された宦官・禁軍勢力及びこれと結びついた僧侶集団とが、国家守護のための最新の仏教思想を整備したのである。さらに般若ら僧侶集団は、最も効能のある種々の陀羅尼を唱え、国土守護に努めたと考えられる。

このように宦官・禁軍勢力は、安史の乱以来、国土守護を標榜した僧侶集団と結びつき、彼らを支えてきた。ところで、本經典の翻訳事業には不可解な点が残る。それは、当初は「梵本」ではなく、わざわざ「胡本」によって、仏教僧侶の般若だけでなく景教僧侶も参加して「翻訳」していたという点である（本章(2)aの表1，貞元3年?の箇所）。「護国」の為の經典を必要とするのであれば、初めから「梵本」を用いて、表2の訳経集団が「翻訳」すればよかつたはずである。にもかかわらず、「胡本」によつたのは何故だろうか。この点については、『六波羅蜜經』翻訳が、吐蕃のような所謂「外敵」に対抗する目的のためにだけなされたのではなく、さらに長安仏教界を支えた宦官率いる禁軍内部の人的構成も深く関わっていたことに目を向けねば明らかにはならない。そこで、次章では、この宦官・禁軍勢力の人的構成に着目してみたい。宦官・禁軍勢力が拡大していくにあたり、いかなる人々を吸収していったのかについて、宦官台頭の契機となった安史の乱に遡り述べてみることにする。

## 第二章 安史の乱～徳宗期の宦官・禁軍勢力の人的構成

### (1) 安史の乱期の臨時政府と軍事力拡大

宦官台頭の最大の契機は、靈武と鳳翔府が安史の乱勃発（755年）により長安を逃れた肅宗皇帝の臨時政府の所在となったことにあった。まず、朔方節度使の置かれていた靈武には、肅宗に付き従った張氏妃や宦官李輔国といった内廷の勢力、さらに、不空の弟子の僧侶らも結集し、肅宗の皇帝即位を促した〔中田2006：41-42〕。そして河北で鎮圧にあつてた郭子儀軍の兵五万が結集し（756年）、翌年、肅宗は、宦官李輔国内廷勢力と仏教僧侶、そして彼のもとに集まった朔方軍の兵士らと共に、長安奪回に向けて鳳翔府に移る。

さらに、肅宗は鳳翔府に移る前にウイグル、フェルガナ、そして西域の「城郭諸国」に援軍

を求め、その結果、鳳翔府には朔方軍だけではなく、様々な軍が結集することになった。まず、『資治通鑑』（巻218～220）によってその経緯を記すと次のようになる。

- ①756年9月：僕固懷恩らを回紇（ウイグル）に使者として赴かせ、援軍を要請。
- ①' 756年9月：拔汗那（フェルガナ）の兵を徴発し、さらに「城郭諸国」（胡注ではこれを「西域諸国」とする）を巡って、厚く恩賞を与えると「転論」し、援軍として安西の兵に従わせる。
- ②757年正月：安西・北庭・拔汗那・大食諸国の軍隊が涼州・鄯州に到着。
- ③757年2月：隴右・河西・安西・西域の兵が鳳翔府に結集。
- ④757年4月：郭子儀を、天下兵馬副元帥とし、兵を鳳翔に向かわせる。
- ⑤757年9月：回紇が、援軍を率いて鳳翔に至る。広平王・俶（後の代宗）が元帥となつて、朔方等の軍・西域軍・回紇軍を率いて鳳翔を出発。

①～⑤は重複する名称もあるので、最終的に鳳翔府にいかなる兵士が結集したのかを整理しておく。まず、①'で、安西がフェルガナと「城郭諸国（西域諸国）」の兵を率い援助に向かう。そして、それに北庭の兵が加わった結果が②である。②は、①'の安西を中心とする軍が、涼・鄯州に到着したことを意味している。すなわち、①'と②の関係からいえば、①'の「城郭諸国」は、②の「大食諸国」に等しいということになる。次に、これらの軍にさらに涼州・鄯州の軍も加わって、③で鳳翔府に結集する。よって、③の河西は涼州の軍を、隴右は鄯州の軍を、安西は安西・北庭をさすとみてよいだろう。とすると③で残る西域は、②の安西・北庭・涼州・鄯州を除く拔汗那と大食諸国の総称になろう。以上に加え、略年表にあるように、756年に于闐（コータン）が救援に向かっていることから、これも西域の中に加えられる可能性がある。そして、この③の軍に④の郭子儀率いる朔方軍と、⑤のウイグル軍（①で援軍の要請を受けた）が加わり、これらが長安奪回に向けて鳳翔府を出発するのである。

ところで、②の「大食諸国」とは、アッバース朝を指すとみてよいだろうか。稲葉氏は、この大食の軍隊はアッバース朝が正規に派遣した軍隊を指すのではなく、当時トランスオクシアナには反アッバース朝勢力が流入しており、これらから徴発したアラブ傭兵を大食と呼んだと指摘する〔稲葉2001：24-26〕。「大食諸国」は「城郭諸国（西域諸国）」に等しいのであるから、ここをトランスオクシアナとするのであれば、稲葉氏が指摘する反アッバース朝勢力に加え、トランスオクシアナのソグド諸国も含む可能性もある。また、ソグド諸国やトハリスタンはアッバース朝の影響が強くなってからも、しばらくは完全に独立性を失ったわけではなかった<sup>7)</sup>。

7) たとえば、758年7月には吐火羅葉護烏那多と、「九国首領」が来朝し、安史軍討伐の協力を申し出てい

略年表 肅宗期における唐軍および宦官・禁軍勢力の動向

至徳元（756）7月	・甲子（12日）肅宗、靈武で即位。 ・郭子儀、兵五万を率いて河北より靈武にいたる [資218]。	宦官李輔国、張氏妃等とともに、肅宗即位を促す。 李輔国は判元帥府行軍司馬に拝され、軍号を委ねられる。
9月	肅宗は朔方の兵だけでなく、外国兵を借りようとする。そこで、僕固懷恩らにウイグルに使者として赴かせ、援軍を要請させた。また、拔汗那の兵を徵発し、さらに城郭諸国を巡って、厚く恩賞を与えると「転論」し、安西の兵に従って援軍としてやってこさせた [資218]。	
?月	于闐国王尉遲勝、5千人を率いて救援に向かう。[冊973、外臣部、助国討伐] [資219]	
至徳2（757）正月	肅宗は、安西、北庭、拔汗那、大食諸国の軍隊が涼州、鄯州に到着したことを聞く [資219]。	
2月	肅宗が靈武から鳳翔府に進んだ際に、隴右、河西、安西、西域の兵が結集 [資219]。 吐蕃、救援のために肅宗のもとに遣使来朝する [冊973、外臣部、助国討伐]。	この頃、神策軍も鳳翔府に集ったとみられる [小畑1959] 左右神武軍が組織され、禁軍は北衙四軍から六軍に。
4月	郭子儀を、天下兵馬副元帥とし、兵を鳳翔に向かわせる [資219]。	
閏8月	諸将を遣わし、長安を攻めさせる [資219]。	
9月	回紇が、援軍を率いて鳳翔に至る。広平王・俶が元帥となって、朔方等の軍、西域軍、回紇軍を率いて鳳翔を出発 [資220]。	
10月	肅宗長安帰還。	
乾元元（758）4月		張氏妃、皇后に冊立される。
7月	吐火羅葉護烏那多と九国首領来朝し、安史軍討伐の協力を申し出、肅宗は朔方行宮に赴かせた [冊973、外臣部、助国討伐；唐会要99]。	
9月	郭子儀、李光弼、僕固懷恩等、九節度よりなる安慶緒征討軍編成 [資220]。	魚朝恩が観軍容宣慰処置使となり、安慶緒征討軍を監視 [資220]。
乾元2（759）3月	郭子儀以下九節度使からなる安慶緒征討軍が敗北 [資221]。	魚朝恩は敗戦した郭子儀を誹謗し、7月、郭子儀の朔方節度使及び兵馬元帥を解任せしめた [資221]。
12月	戊申 蕃胡、柘羯のために三殿で宴を設ける [冊976、外臣部、褒異]	
上元2（761）3月	史思明殺害される [資222]。	

注1：本年表は、『資治通鑑』、『冊府元龜』、『唐会要』をもとに作成。適宜、小畑1959、友永1994を参照した。

注2：資：『資治通鑑』 冊：『冊府元龜』

よって、②の「大食諸国」とは、八世紀中葉にホラーサーン～トランスオクシアナー帯がアッバース朝の影響下に入りつつあったことをふまえ、「大食（アッバース朝）の影響下にある諸国」としたか、または稲葉氏が指摘するように大食を反アッバース朝勢力とみて、「大食（反アッバース朝勢力）とそれ以外（ソグディアナやトハリスタンなど）の諸国」であることを表現した可能性がある。ここで、ソグド人兵士が援軍としてがやってくる傍証として、鳳翔を臨時政府としていた唐が長安を奪回する直前の状況をうたった杜甫の詩「官軍已に賊寇に臨むと聞くを喜ぶ二十韻（喜聞官軍已臨賊寇二十韻）」（『杜工部集』）をあげておきたい。このなかで、唐への援軍について「花門絶漠に騰（あが）り、拓羯臨洮を渡る（花門騰絶漠、拓羯渡臨洮）」と述べている。「花門」はウイグルからの援軍を指し<sup>8)</sup>、「拓羯」はソグド語「チャカル」の漢字音写であり、ソグディアナの君主に仕える直属の戦士集団を指す<sup>9)</sup>。これはおそらく杜甫が西域方面からやってくる援軍を見て「チャカル」と呼んだのであり、そのなかにソグド人兵士を含んでいたという現実をふまえてのことだったとみられる。

以上のように中央アジア～河西・朔方方面の地域から兵士が鳳翔府に結集したことは、長安奪回に大いに寄与しただけでなく、宦官が勢力を伸張する上でも極めて重要な意味を持つことになった。たとえば、ソグド系の武人の何遊仙に注目してみよう。彼の息子の「何文哲墓誌」<sup>10)</sup>によれば、「公諱文哲、字子洪、世為靈武人焉」とあるように、一族は靈武に基盤を置いていたとみられ、森部氏が指摘するように靈州に隣接する六胡州のソグド系突厥である可能性が高い〔森部2004：74-75；同2008：153-154；同2010：138-139〕。何遊仙は「宝応元従功臣」であることから、安史の乱の最中に、宦官率いる射生軍に入ったことが分かる<sup>11)</sup>。靈武に基盤をおいていた何遊仙は、おそらく、反乱鎮圧のために肅宗に付き従って鳳翔に向かい、その後、さらに長安奪回に

る（略年表）。この「九国」は吐火羅と併記されていることから見てソグド諸国をさす可能性が高い。また、森安氏は、751年のタラス河畔の戦い以降、ソグディアナ本国はすでに完全にアラブのアッバース朝支配下に入り、徐々にイスラーム化するが、それでも762年、772年にいたってもなおソグド諸国が大食やウイグルと並んで唐朝に朝貢していることから、アラブ側もソグド諸国に朝貢貿易を続行させるため、独立国のような体裁を取らせていた可能性を指摘している〔森安2007A：206〕。

8) 漢籍資料中にみられる「花門山」または「花門山堡」は、居延海の北三百里、河西回廊からウイグルへの入口に位置する。ウイグルがこの地域を占拠してからは、「花門」はウイグルの異称となった〔孟1993；森安2007A：352-353〕。

9) チャカルについての研究は多数あり、前嶋1965：419-421では拓（柘）羯の原語をめぐる研究がまとめられている。最近のものとしては、De La Vaissière2005が挙げられる。

10) 『隋唐五代墓誌匯編』陝西4（天津古籍出版社、1991年）：107；『全唐文補遺』1（三秦出版社、1994年）：282-286；『唐代墓誌彙編續集』（上海古籍出版社、2001年）：893-896

11) 「宝応功臣」については、本稿第1章(2)b-iii. を参照。



協力したとみられ、この鳳翔召集～長安奪回までの間、もしくは長安奪回後のいずれかの時点で射生軍に入ったのであろう。また、拙稿 [中田2007: 50-52] で紹介したように、安暉 (李国珍) や羅伏磨のような涼州出身のソグド系やバクトリア系の武人も、おそらくは鳳翔府に召集され、そののちに射生軍に組み込まれたとみられる。

また、神策軍は、本来、勢力を伸張し続ける吐蕃に対抗するために洮河の河源附近におかれていた辺境軍であったが [小畑1959: 39]、安史の乱鎮圧のために東方に移動し、その後宦官に率いられることになった。③の隴右・河西から招集された軍の中には、神策軍も含まれていた可能性がある [小畑1959: 42]。おそらく神策軍は鳳翔府で優秀な兵士を取り込み、強化されていたのであろう。また、以上のような射生軍や神策軍等の宦官の勢力下に入っていく者以外に、郭子儀の指揮下に編入された者もいたであろう。

そして、長安奪回に成功した翌年の758年7月には、肅宗は安史軍討伐の協力を申し出た吐火羅葉護烏那多と九国首領<sup>12)</sup>とを朔方行営に赴かせた (略年表)。これによって朔方軍は、吐火羅・九国からの援軍を吸収し、さらに強力になったとみられる。

以上より、唐側に結集した兵士は、1. 朔方及び河西・隴右節度使下の兵士 (蕃・漢の兵士からなり、なかには涼州や靈武のソグド系武人を含む)、2. 神策軍、3. 西域方面から集められたチャカルや反アッパース朝勢力・フェルガナ・コートン・安西・北庭の兵士、4. ウイグル、であり、これらが安史の乱鎮圧のために鳳翔府の臨時政府に一堂に会し、さらに、朔方行営には吐火羅・九国の兵士が加わった。そして、これらのうち本国に帰還するウイグルをのぞいて、朔方軍や宦官が率いる禁軍に吸収され、彼らこそが反乱後の長安及び西北方面の防衛の主要戦力になっていったとみてよいであろう。

## (2) 朱泚の乱の鎮圧から「胡客」の神策軍編入まで

次に、徳宗期における禁軍の人的構成を確認しておきたい。まず、朱泚の乱鎮圧で活躍した神策軍の主要メンバーであり、「奉天定難功臣」でもあった李晟に注目したい。李晟の伝記 [『舊唐書』卷133李晟伝・『新唐書』卷154李晟傳] によると、李晟は隴右臨洮の人、代々隴右の裨將で、騎射に優れていたという。出身地が隴右であることや、その能力から見ても、先に検討した肅宗の行在のあった鳳翔府に結集した兵士の一人である可能性もあろう。肅宗末～代宗初め頃に鳳翔節度使の高昇に仕え、その後、大暦初めには李抱玉に仕え、対吐蕃で活躍した後、右神策都將になったという。李抱玉は涼州に基盤を置く安姓をもつソグド人武將で、禁軍率いる宦官魚

12) 注7でも述べたように、「九国」は吐火羅と併記されていることから、ソグド諸国をさす可能性が高い。

朝恩と結びついて僕固懐恩の乱を鎮圧し、さらに長安仏教界ともつながりを有していた〔中田2007: 46-47〕。よって、李晟が李抱玉の元におり、のちに神策軍に入っていることなどから、李晟にも代宗期の頃から宦官・禁軍勢力とのつながりがあったのかもしれない。徳宗建中二（781）年に魏博節度使の田悦が反乱を起こすと、李晟は、神策先鋒都知兵馬使として、河東節度使馬燧や昭義節度使李抱真と合兵して戦い、続く朱泚の乱では神策軍を率いて最終的に長安奪回に成功した。この長安奪回で李晟のもとに結集した主要メンバーは、『旧唐書』巻133李晟伝によると、

晟は諸將駱元光、尚可孤、兵馬使吳詵、王佖、都虞候邢君牙、李演、史萬頃、神策將孟涉、康英俊、華州將郭審金、權文成、商州將彭元俊等を大集し、號令誓師畢るや、兵を光泰門外に陳せしむ。

とあり、このうち、駱元光は涼州出身の安姓のソグド人で、代宗期に活躍した宦官駱奉仙の養子になり、禁中の衛士として仕え、その後、鎮国軍副使（建中四（783）年に節度使に昇格）として長安東方の防備に当たった〔中田2007: 53〕。徳宗期においても引き続き活躍していることが分かる。また、駱元光以外にも、史萬頃・康英俊といったソグド姓をもつ武人が含まれている。尚可孤は鮮卑系の武将で、代々松漠にいたとされ、天宝末に安祿山や史思明につかえるが、その後、唐に帰順して宦官魚朝恩の養子となり、神策軍に入った。駱元光と尚可孤はともに代宗期に宦官勢力のもとで活躍した武将である〔中田2007: 52-53〕。邢君牙は、『旧唐書』巻144邢君牙伝によれば、瀛州の人で、若くして幽薊・平盧で従軍していたが、安祿山が反乱を起こすと、反側に付かず平盧節度使侯希逸に随ったという。そして広徳元（763）年10月には、吐蕃の長安侵攻によって代宗が陝州に逃れると、禁軍に属してこれに随行したという。禁軍は、ちょうどこのころから宦官魚朝恩によって率いられることから、宦官魚朝恩の配下に入った可能性が高い。その後、李晟に仕え、貞元三（787）年からは、李晟にかわって鳳翔尹・右神策行營節度使として神策軍の外鎮を任せられ、吐蕃鎮圧に当たった。つまり、尚可孤と邢君牙はともに当初は安祿山・史思明の下に仕えていたが、その後、禁軍に入ったことがわかる。このように、朱泚の乱で活躍した武将らの多くが、禁軍に仕えていた（もしくは後に仕えた）人々であり、なおかつ非漢族を多く含んでいたことが分かる。

上記以外にも、ソグド人である何文哲の墓誌によると、「夫人康氏、皇奉天定難功臣・試光祿卿普金之女」とあって、何文哲夫人の父康普金は、奉天定難功臣であることから、反乱鎮圧に協力したソグド系の武人であったことがわかる。なお、何文哲の父何遊仙は、先に述べたように、宦官率いる射生軍下にいたことを示す宝応功臣であることから、何文哲の実父・義父ともに宦官とのかかわりのもとで活躍していたことになる。何文哲自身もその後、宦官トップの地

位にある左神策軍護軍中尉の竇文場に抜擢され「左軍馬軍副将」として神策軍に入るが、これも父親らの功績を重んじたことによるものであろう。そして、『六波羅蜜経』翻訳の施主である羅好心も神策軍下で活躍したトハリスタン・または罽賓出身の武人である。以上、羅好心を筆頭に非漢族の武将が神策軍下で宦官と共に活躍しているように、肅・代宗期以来、禁軍は、河北・靈武・涼州そして中央アジア出身の武人を取り込んでいったとみられる。

以上に加え、貞元三（787）年になると、「胡客」四千人が神策軍下に編入される。『資治通鑑』（巻232、貞元3年7月条）によると、吐蕃の河西・隴右進出により、帰路を絶たれ長安に抑留していた「安西、北庭奏事及西域使人」すなわち「胡客」は、唐朝から給を仰ぎ、田宅を購入し、高利貸しを行なうものも出てきたため、市井が困窮したという。そこで李泌は、ウイグル道を通って帰国するか、神策軍に入るかを選択させたところ、誰一人として帰国は望まなかったため、すべて神策軍に編入させることになった。彼らのうち、王子や使者は、神策軍散兵馬使か押牙に、それ以外は皆兵士とし、禁軍は益々強力になったという。これによって、神策軍下での非漢族の武人が占める割合は更に高くなると考えられる。このことは例えば、神策軍系統の武将にソグド姓を持つ者が少なからず存在することからも確認されている [李1996: 40]。

このように、神策軍は貞元三年頃までに非漢族の人々を多く取り込んだハイブリッドな軍隊として、その体制を整えていった。このことは、時期的に見て先述した唐の対吐蕃政策にも関わっていたと考えられ、実際に、この頃の神策軍は常に吐蕃の動向をにらんだ活動を行なっている。そこで、次に、当時の吐蕃の勢力伸張との関連から、神策軍がどのように変遷したのかについて述べてみたい。

### (3) 神策軍外鎮と朔方軍の解体

安史の乱以降、吐蕃に対する防波堤的役割を果たしてきたのは、主に靈武を本拠地とする朔方節度使である。ところが、吐蕃に対向するために朔方軍に軍備を集中させることは、唐朝にとって危険を伴った。朔方節度使は、ソグド人の安思順、契丹人の李光弼、トルコ人の僕固懷恩、そして靺鞨の李懷光らが歴任していることから分かるように、戦闘能力の高い非漢族が多く集っていた。実際に、安史の乱鎮圧で朔方節度使は、唐朝が唯一頼ることのできる、いわば近衛軍的役割を果たした。その領地も安史の乱以降急激に拡大し、764年には単于大都護を兼ね、河中・振武節度使が領していた七州を配下に収め、さらに768年には邠・寧・慶の三州をも兼ねるようになった [李2000: 186-188]。これらは、安祿山率いる営州や幽州の軍隊と同様に、味方につけているうちは唐朝の藩屏として有用であるが、ひとたび反旗を翻せば手がつけられない危険な存在でもあった。禁軍を率い軍事的優位に立ちたい宦官にとってみれば朔方軍は自ら

の地位を脅かす存在であったため、郭子儀やその配下の僕固懷恩を敵対視し、あらぬ嫌疑をかけるなどして常にその弱体化を図ってきた。宦官率いる中央禁軍と、朔方軍とは対立関係にあったといつてよい。その結果、唐に忠誠を誓っていた僕固懷恩が朔方軍を率い、吐蕃・ウイグルと組んで反乱を起こしたのである。同様のことは徳宗期においてもみられ、朱泚の乱に乗じ、郭子儀配下の武将であった朔方節度使李懷光が反乱を起こしている。

以上のような経緯から、朔方節度使下に兵力を投入することは、唐朝を脅かすことにもなりかねないため、唐は朔方軍の弱体化を図らねばならなかった。すでに徳宗即位の779年頃から朔方節度使の領地が分割されるようになっており〔李2000：188〕、軍事力を朔方節度使に集中させるのではなく、分散化させるねらいがあったのであろう。一方で、長安西北方面も手薄にならないように、皇帝が頼みとする神策軍の部隊を派遣し、神策軍の外鎮として旧朔方軍領にも重なる形で配置していった〔李2000：230-245；丸橋2006：132-133, 145-149〕。こういった動きは、西北方面に対する防備を、中央主導のもとに実施することの表明と見てよいだろう。

神策軍外鎮は、代宗期の頃から設けられており〔小畑1968；日野1974（1980：130-135）〕、例えば先述の尚可孤（宦官魚朝恩の養子で鮮卑系）といった、騎射能力に長けた武将がその任に当たっている〔小畑1968：212〕。貞元三年八月には、吐蕃の隴州侵攻を受けて、翌月に神策軍將の石季章が武功（京兆府）に派遣され〔『資治通鑑』卷233、貞元3年8～9月条〕、同八年には、吐蕃の靈州侵攻を受けて、神策六軍が朔方軍下の定遠・懷遠に派遣されている〔『資治通鑑』卷234、貞元8年4月条〕。また、神策軍の兵士でありながら、節度使をかねる例も次第に見られるようになり、そのなかには、ソグド姓を持つ人物を確認することができる<sup>13)</sup>。このように、神策軍は次第に辺境守備の任務をも兼ねるようになるなど、その勢力を伸張してゆき、貞元14年には神策軍の総兵力は十五万人に達したという〔『資治通鑑』卷235、貞元14年8月条〕<sup>14)</sup>。安史の乱以降、肅・代・徳宗期にわたって宦官率いる禁軍下に吸収されていった非漢族出身の武人は、おそらくは、その騎射能力の高さを買われて、中央宿衛に入る者もいれば、外鎮に配置される者もいた<sup>15)</sup>と考えられ

13) たとえば、康芸全（左神策大將軍・鄜坊節度使）、康志睦（右神策大將軍・平盧軍節度使）、何文哲（左神策將軍知軍事・鄜坊丹延節度使）など〔何1990：41-42〕。

14) 諸史料中に散見する神策軍外鎮については、丸橋氏が網羅的に取り上げている〔丸橋2006：164-167〕。また神策軍の外鎮には、朝廷から臨時で派遣されたものや、節度使が兼ねたもの以外に、神策軍に「遙隸」したものの、すなわち神策外鎮兵に各道の兵の三倍の厚給を与え、神策軍に形式的に編入（「遙隸」）させたものもある〔何1990：49；丸橋2006：148-149〕。これに関連して、村井氏は「李良儻墓誌」を用い、徳宗期に吐谷渾人を核として編成された「雜虜」集団からなる安塞軍が、元和元年以前に左神策軍に「遙隸」したと指摘している〔村井2009：147-148〕。

15) 神策軍外鎮下のソグド姓を有する武人の例として、次のようなものが挙げられる。石季章：神策軍將として貞元三年に吐蕃鎮圧のため武功（京兆府）に派遣される〔『資治通鑑』卷233、貞元3年9月条〕／康

よう。

以上、安史の乱以来、長安仏教界を支えた禁軍の下には多くの非漢族の武人が取り込まれていったこと、そして朔方軍の解体と神策軍の拡張とを確認した。実はこれらのことが、「梵本」翻訳に先んじて行われた神策軍の羅好心主催下での景教僧と仏教僧による「胡本」の翻訳に深くかかわってくるのである。その理由について次章で中央アジアの情勢と、安史の乱後の宗教界の状況とをふまえつつ検討してみたい。

### 第三章 中央アジアの動向と『大乘理趣六波羅蜜多經』

#### (1) 罽賓国情勢と般若・羅好心の来唐

まず、徳宗期の長安仏教界を支えた般若とそのいとこであり訳経施主の羅好心の出身地、及び彼らの来唐の経緯を整理しておきたい。般若の出身カーピシーは、ヒンドゥークシュ山脈南麓に位置し、七・八世紀には、カーブル～カーピシー～ガンダーラ地方一帯を支配したトルコ系ハラジュ族のカーブルシャー王国の支配下にあった。このカーブルシャー王国は「罽賓」として漢籍に現れ、王は仏教を奉じていたとされる〔桑山1990：229-274；稲葉2004；同2010：172-169（逆頁）〕。いっぽう、羅好心の出身は史料中に明記されていないが、般若と同じ罽賓か、もしくは、羅姓であることから、吐火羅（トハリスタン）出身のバクトリア人の可能性がある。

そもそも、般若の出身地は罽賓とはいえ、実は彼自身も吐火羅とつながりを有する。羅好心の父と般若の母は兄妹であり、かつ羅姓である。つまり、ともに吐火羅出身の可能性ある<sup>16)</sup>。また、八世紀前半の罽賓王カーブルシャーは活発な外交戦略を用い、その結果ヒンドゥークシュ、カラコルム山脈の南北を結ぶ同盟関係を結び、カーブルを中心にトハリスタン、ザーブリスタン、カシミール、コータンを結びつけるなど、中央アジア方面と強固な関係を構築しようとしていたという〔稲葉2010：155-154〕。罽賓とトハリスタンとが密接な関係にあるのであれば、般若や羅好心のような罽賓出身のバクトリア人が存在したとしてもおかしくはない<sup>17)</sup>。カー

志寧：左神策軍華原鎮退兵馬使兼御史大夫として華原鎮（京兆府）に駐留していた〔『冊府元龜』卷131、帝王部・延賞〕／康承訓：神策將軍として咸通二（861）年十二月に安南府の反乱鎮圧に軍を率い江西・湖南の兵と共に救援にむかう〔『旧唐書』卷19上、本紀、懿宗〕。

また、本章（2）でふれたソグド人駱元光（後に李元諒に改名）率いる軍も後に神策軍に吸収されている。駱元光は宦官との結びつきが強く、若くして禁衛に入ったとされるものの、神策軍に入ったことは確認できない。しかし、駱元光が率いていた軍（死の直前は吐蕃に対する防御を固めるため良原に駐屯）は、その死後、彼の部將の阿史那敍にそのまま継承され、さらに神策軍に編入された〔何1990：71・78〕。

16) また、罽賓国は、顯慶年間（650-660）に吐火羅支配下に一時的に置かれており〔cf. 馬2008：572〕、ここから羅姓が用いられた可能性がある。

17) カーブルシャー王国以前の事例になるが、福島氏によれば、6～7世紀初めの李氏一族もカーピシー出身

ピシーにつながりをもちつつ、ヒンドゥークシュの南北麓にまたがって活動していたという可能性もあろう。

羅好心と般若の来唐は、彼らの活動時期からみて以上のようなトハリスタン・カーピシー・カーブル情勢とかかわっていると考えられる。八世紀前半、イスラーム勢力の東進に対し、ソグドの諸都市国家とテュルク族が同盟関係を結んでそれに対抗していたとされるが、稲葉氏が指摘するように、おそらく、さらにその南の、カーブルを中心とするヒンドゥークシュ山脈南北地域においても同様の対抗措置が模索された。実際、カーブルシャーはヒンドゥークシュ、カラコルム山脈の南北地域の諸国と強固な同盟関係を構築しようとしていた。ただし、こうしたカーブルシャーの努力は、唐と吐蕃の衝突をはじめとする周辺地域の情勢の変動などが阻害要因となり、十分な成果を挙げられなかったとみられている [稲葉2010: 155-154逆頁]。羅好心と般若の来唐の背景には、以上のようなイスラーム勢力の東進がヒンドゥークシュ・カラコルム山脈の南北地域におよぼした政治・外交・文化などあらゆる面のプレッシャーがあったのだらう<sup>18)</sup>。

では、羅好心はどの段階で神策軍に入ったのか。先述したように、朱泚の乱鎮圧に参加していたことから、それよりも以前であることは間違いない。羅好心が翻訳終了後に徳宗に献上した上表文の一節に、

臣の家は西蕃なるも中國に居するを得、名は戎禁 (= 禁衛) に參じ、榮は私門に及べば、父子は相い歡び實に天地に慚 (は) ず。 [『続開元録』上: 756b; 『貞元録』17.893b]

とあって、羅好心は父子ともに禁軍に仕えていたことがわかる。ただし、ここでいう「父」「子」

---

のバクトリア人である可能性が高いとされる [福島2010]。

18) 桑山氏によれば、鬪賓は、720年前後から750年前後に集中して唐への朝貢を活発に行なっているが、これは単なる朝貢ではなく、イスラーム軍に対処するために唐朝に何らかの支援を求めた可能性があるという。また、中国にわたった僧侶のうち、インド僧は7世紀に集中するのに対し、8世紀になるとカーピシー出身の僧侶が集中するようになる。これは、カーピシーへのイスラームの影響もしくはヒンドゥーの影響が強くなったことと関わるという [桑山1990: 269, 274]。

また、般若は、『六波羅密経』翻訳終了後、吐蕃の勢力をその四方から封じ込めるために、徳宗の命を受けて「北天竺迦濕蜜 (カシミール) 国使」としてカシミールに派遣された [岩崎2002; 中田2010]。カシミールは、カーブルと強固な結びつきを有していたとされる [稲葉2010: 160-159]。こうしたことからみても、般若の来唐は、単なる仏教布教という目的に基づくものではなく、イスラーム勢力や吐蕃に挟まれた八世紀中葉におけるカーブルを中心とする地域がおかれた危機的状況を打開するという政治・外交的目的に基づくものであった可能性がある。こうした般若や羅好心の来唐の背景にみられる政治・外交的な側面については、八世紀のヒンドゥークシュ・カラコルム山脈地域の諸国の動向と、その東西を挟むイスラーム勢力と吐蕃の動向とをあわせて検討する必要がある。この点については、別の機会に改めて論じたいと思う。

のどちらが羅好心を指すのかは不明である。「子」が羅好心であるならば、羅好心が活躍したのは朱泚の乱であるから、その父が活躍したのは安史の乱～僕固懷恩の反乱の頃ということになる。八世紀中葉には罽賓や吐火羅からの朝貢が度々みられることから〔桑山1990：付録4〕、これに伴って来唐したか、または、第二章でみたような安史の乱鎮圧のために唐に結集した兵士であった可能性がある。羅好心も父同様、禁軍に入り、その後反乱鎮圧で功績をあげ「奉天定難功臣」の称号を賜ったと考えられる。一方、「父」が羅好心を指すとすれば、朱泚の乱以前に来唐し、羅好心自身の子も禁軍に入ったことになろう。

一方の般若は羅好心より遅れて入唐するものの、その後わずか数年で『六波羅蜜經』翻訳という国家仏事に携わることになった。これを可能ならしめた要因として、当然羅好心とのコネクションを考える必要がある。羅好心は「奉天定難功臣」として右神策軍に仕えていたのだから、右神策軍のトップの地位にあり、かつ功德使として仏教界を統括し、徳宗からも絶大なる信頼を得ていた宦官王希遷の配下にいたということになる。よって、羅好心が、仏教界の統括者である王希遷に般若を推薦したと見るのが自然であろう。般若が来唐後、長安仏教界ですぐに活躍する機会を得たのは、羅好心が仏教界と結びついた宦官率いる神策軍下に取り込まれていたことによるとみてよい。そして、この羅好心と般若が最初に取り組んだ仏教事業が、「胡本」『六波羅蜜經』の翻訳であった。次にその翻訳の背景について述べてみたい。

## (2) 「胡本」の『六波羅蜜經』翻訳の背景

「胡本」の『六波羅蜜經』翻訳の経緯については、以下の史料に詳しく記されている。

（羅）好心は既に三寶を信重せば、佛經を譯さんことを（般若に）請い、乃ち大秦寺の波斯僧景浄とともに、胡本六波羅蜜經に依りて訳して七卷と成す。時に般若は胡語を閑わず、復た未だ唐言を解せず、景浄は梵文を識らず、復た未だ釈教に明らかならざるが為に、傳譯を稱すと雖も、未だ半珠を獲ず、竊かに虚名を圖り、福利を爲すに匪ず。表を録して聞奏し、流行するを意望す。…〔『統開元録』上：756a；『貞元録』17：892a〕

胡本の翻訳を般若と景浄に実施させたのは、仏教を信仰していた羅好心である。般若はインド語（梵語）は問題ないが、「唐言」つまり漢語を理解しておらず、「胡語」は「閑（なら）わず（不閑）」であったという。それに対し、景浄は「胡語」は問題なかったであろうが、梵文および仏教に明るくなかったという。このような状態で翻訳を実施し、それを「翻訳」と称したものの、完成品とよぶには程遠かった。にもかかわらず、（羅好心 or 般若が）上奏して、經典を天

下に流布させるように徳宗に請うたという<sup>19)</sup>。

ここで、景浄の出身について検討しておこう。景浄は「波斯僧」とあるが、この波斯は、既に七世紀に滅んでいるササン朝ペルシアであるはずはなく、景教僧の意味である<sup>20)</sup>。では、景浄は、どこから来たのか。可能性が最も高いのは、トハリスタンである。森安氏によれば、八世紀末～九世紀中葉の仏教世界地図「蕃漢対照東洋地図」の「波斯国」は「トハリスタン（旧バクトリア）の一部ないしその東方近辺」を指し、この地域には、ネストリウス派キリスト教集団がいた可能性を指摘する〔森安2007B：14-15〕。これに加え、景浄が撰述し、建中元年に建てられた「大秦景教流行中国碑」（以下「景教碑」）の「大施主」である伊斯の出身「王舎城」も参考になろう。「王舎城」は、トハリスタンの主邑バルクを指し、ネストリウス派の一中心地であった。伊斯が唐に移り住むとき、常識的に考えて他にも景教徒を帯同していたと考えられることから、その中に景浄が含まれていた可能性は高い。以上より、景浄はトハリスタンの出身で、般若や羅好心と同様にイスラーム化の波を避けて唐内地に来たネストリウス派の僧侶とみてよいだろう。

一方の般若は、「胡語」は「不閑」であることから、少なくともこの「胡語」が彼の母国語ではなかったとみられる。般若の出身カーピシーでは、インド語かバクトリア語が話されていたこと〔稲葉2004：366〕、また、般若の父親は、「喬答摩ゴータマ」姓のインド人、母親は「羅」姓でトハリスタンのバクトリア人の可能性が高いことなどから、般若はインド語とバクトリア語を話す環境下にいたことは明らかである。この「胡本」翻訳事業の中心人物である景浄と般若、そして羅好心の3人の共通語は、その出身地からみて、おそらくバクトリア語であったとみられる<sup>21)</sup>。とすれば、般若が「不閑」であった「胡語」とは、バクトリア語以外の言語の可能性が高く<sup>22)</sup>、かつ、景浄がある程度は操ることのできる言語でないといけな。となると、少なくとも

19) 唐初の事例になるが、敦煌文書中の長安宮廷写経の分析を行った藤枝氏によると、長安で翻訳された仏典は、天下に伝えるために内廷で写しが作成され、その後、それらが地方に頒下されていくという。地方の数を考慮すれば、必要となる写本数は膨大であり、内廷では相当数の人員を送り込んだ大規模な写経事業がなされたと考えられている〔藤枝1961〕。このことをふまえるならば、ここでいう「流行」とは、翻訳終了後に、徳宗皇帝の認可のもとでその写本を作成し、それらを天下に広めることになるだろう。

20) 「波斯」が顔面通りの意味でないことは、八世紀の不空訳の「宿曜経」からも明らかにされている。「宿曜経」の中の「波斯名」の七曜にはソグド語の要素がみられることから、「波斯名」とは「ペルシアの名前」ではなく、「ネストリウス派キリスト教徒が使う名称」という意味であるという〔吉田1994：299〕。

21) 726年に罽賓を通過した慧超によれば、罽賓の「衣着・言音・食飲」は吐火羅と大差ないという〔cf. 桑山1998：22、40〕。

22) ただし、次の史料によると、般若は「胡語」を全く解さないというほどのレベルではなかった可能性が出てくる。『貞元録』巻17によると、貞元11年、般若は『四十華嚴』翻訳に先立って、梵語『四十華嚴』の



もイラン語系統の言語ということになる<sup>23)</sup>。

ここで疑問となるのが、「梵本」があり、当時の長安には利言のような梵語・漢語を解する仏教僧侶がいたにもかかわらず、羅好心は何故あえて「胡本」を用い、景浄に翻訳をさせたのかという点である。それは、ほかならぬ景浄に翻訳に関わらせる必要があったため、とみるのが自然であろう<sup>24)</sup>。そもそも、この翻訳事業には宦官や羅好心などの神策軍の思惑が大きく影響していたことから、景教僧を参加させることにも彼らの何らかの意図があったと見るべきである。神策軍を統括する宦官が、仏教を信奉していたとはいえ、第二章で明らかにしたように、その配下には非漢族出身の兵士を多く含んでおり、彼らの奉ずる宗教すべてが仏教であるとは考えにくい。すなわち、景浄を景教徒の代表として参加させることで、景教徒の支持を獲得し、さらには、もし可能ならば、単に仏教経典を「仏教的」に翻訳するのではなく、「景教的」な要素

---

題名の翻訳を実施する。その際に、「(般若) 三蔵は乃ち梵語を以て翻して胡音を作り、沙門智真は訳して漢語を成す」と、般若が梵語の題名を「胡音」にし、智真がその胡音をもとに漢語に訳したという。梵語から直接漢語に訳さない回りくどい方法を取ったのは、般若は漢語が解らなかったのと、貞元11年の時点では梵語と漢語の両方に精通する僧侶が長安にいなかったためであろう（おそらく利言はこのとき既に死去）。そこで、般若は少しは「胡語」を解していたので、梵語を「胡音」にし、智真がその「胡音」を漢語に訳したとみられる。よって、智真は、「胡語」を解し（もしくは母国語が「胡語」）、しかも般若との共通語は、「胡語」であったと考えられる。ただし、般若は、梵語の『四十華嚴』を全て「胡音」にするほど「胡語」に精通していなかったので、『四十華嚴』本文全体を翻訳する際には、梵語を解する僧侶を洛陽から招いた。もし、ここでいう「胡音」と、『六波羅蜜經』の「胡本」の「胡」が同じものを指すとすれば、般若は、「胡語」を全く知らないと言うレベルではなく、少なくとも漢語に比べれば「胡語」のほうが得意であったことになろう。

しかしながら、「胡」がソグドを指し、吐火羅とさえも明確に区別される場合もあれば〔森安2007B〕、『宋高僧伝』巻3「唐京師滿月伝」の末に付された賛寧の訳経論のように、「雪山」以北と以南で「胡」と「梵」とに区分され、「胡」には、羯霜那国（＝史国）や吐火羅、迦畢試が含まれるとあり、単に「梵」と区分する大まかな意味であることもある。このように「胡」の持つ意味は広範囲に及ぶので、「胡音」と「胡語」の胡が同一のものであるかどうかは、傍証となりうる資料がない限り明らかにすることはできない。

23) 「胡本」はソグド語で書かれた仏典の可能性もあるが、ソグディアナ現地で仏教が根付かなかったこと、現存するソグド語仏典はすべて敦煌・トゥルファンで発見され、それらは漢訳仏典からの重訳であること、そしてソグド現地で発見されたソグド語仏典が一点も存在しないことから〔吉田1997: 238-243〕、ソグド語の可能性は低いと考えられる。次に可能性があるのはコータン語である。コータンは仏教の一大中心地であるので、ソグド語に比べ可能性が高い。ただし、コータン語仏典から漢語に訳した事例はいまのところみられないので〔吉田2003: 229〕、更に検討する必要がある。「胡本」問題は今後の課題とした。

24) フォルテ氏は、景浄が記した「景教碑」には多くの仏教術語が用いられていることから、景浄が仏教を苦手としていたという点には懐疑的である。また、景浄を翻訳に参加させたのは、当時の長安では翻訳チームを結成することが難しく、景浄に頼らざるを得なかったとみる〔Forte1996: 445-446〕。しかしながら、実際は、第一章でみたように利言をはじめとする有能な訳経集団が存在していたことから、たとえ景浄が仏教を理解していたとしても彼に頼る必要は無いはずであり、むしろ、景浄でなくてはならない理由を考えるべきであろう。

を取り込みつつ「翻訳」させたかったのではないか。それには、景浄が言語上問題のない「胡本」を選ぶことが重要であった。以上のことから「胡本」使用の目的は、景教僧参加の意義から明らかにしていく必要がある。そこで、次節で当時の景教徒の動向を整理しておきたい。

### (3) 景教徒の勢力拡大とその背景

仏教徒と景教徒にとって、安史の乱は、唐朝の庇護を得て自らの勢力を拡大させる契機であったとみられる。まず、仏教について言えば、安史の乱が起きると肅宗の臨時政府となった靈武に不空が弟子達を送り込み、反乱鎮圧のための護国活動を実施させ、その功績によってそれ以降も長安で皇帝の支持のもと積極的に活動している [中田2006]。そして、安史の乱期に長安に移ってきたソグド姓やバクトリア姓のものが不空の門下に入るなどして、不空の長安仏教界での活動を支えた [中田2007: 54-57]<sup>25)</sup>。つまり、安史の乱期に中央アジア方面から唐にやってきた人々のなかには、第二章で述べたような禁軍などに編入された者だけではなく、長安仏教界にも進出した者もいたのである。

一方の景教徒も、安史の乱鎮圧で活躍したとみられている。特に朔方節度使下の景教徒の活躍が顕著であった。たとえば、景教僧でありかつ「景教碑」の大施主でもあった伊斯は、朔方節度使郭子儀率いる軍下に入り、反乱鎮圧で活躍した武将として有名である。また、「景教碑」によると、肅宗が認可した景教寺院の設置場所として、「靈武等五郡」と靈武が筆頭にあげられているように、朔方軍下の景教徒が反乱鎮圧で活躍したとみられる<sup>26)</sup>。

朔方軍中に景教徒が存在する背景として、もともと朔方軍下に景教徒が存在した可能性もあろうが、それ以外に、安史の乱の最中に唐軍に協力するために新たに唐にやってきた外来人のなかにも景教徒が含まれ、それらが朔方軍中にとりこまれていった可能性も考えねばならない。バルク（王舎城）出身の伊斯は、「景教碑」によれば、

大施主・金紫光祿大夫・同朔方節度副使・試殿中監・賜紫袈裟僧伊斯は、和にして恵を好

25) なお、不空の門下に入ってきたソグド姓・バクトリア姓の弟子のほとんどが長安の寺院に配置されるが、なかには康守忠のように洛陽（「東京広福寺」）に配属された者もある [中田2007: 55]。不空は、長安仏教界のみならず、洛陽にも自らの息のかかったソグド人を派遣し、洛陽のソグド系の人々にも影響力を及ぼし、その支持を得ようとしていたのかもしれない。

26) 榮氏は、朔方軍と深い関わりのある770年代後半頃に作成された禪宗史料『歴代法宝記』から、朔方軍下の宗教的傾向を読みとっている。『歴代法宝記』の中で禪宗側が景教の「彌師訶」を「外道」として描いているのは、朔方軍中の仏教徒の景教徒に対する反発からであるという [榮1999A (2001: 364-368)、同2007: 438-439]。ここからも、朔方軍下において仏教側の反感を買うほど景教徒が影響力をもっていたことがうかがえる。

み、道を聞きて勤行す。遠く王舎の城より、聿に中夏に來たる。術の高きこと三代、藝の博きこと十全なり。始め節を丹庭に効し、乃ち王帳に策名し、中書令・汾陽郡王・郭公子儀の初て戎を朔方に總ぶるや、肅宗之をして從邁せしむ。臥内に見親すると雖も、自ら行間に異らず、公の爪牙と爲りて、軍の耳目と作る。

とあり、唐に仕官し、肅宗の命により朔方軍の郭子儀に付き従い、安史の乱の鎮圧で活躍した。伊斯が朔方軍に入った時期は、下線部より、郭子儀が朔方節度使に任命され、かつ肅宗の在位中（756-761）になる。郭子儀が朔方節度使に任命されたのは、玄宗天宝十四載（755年）十一月で（『資治通鑑』巻217）、肅宗在位中においては乾元二（759）年初め頃まではその地位にあったことから、756～759年の間に伊斯は朔方軍に入ったと見られる。この時期から判断すると、伊斯は、安史の乱鎮圧のために西域方面から鳳翔に結集し、その後郭子儀の配下に入った兵士であった可能性がある<sup>27)</sup>。もしくは、次の可能性も考えられよう。758年7月に吐火羅国と九国首領が來唐して討伐援助を願ひ出て、これらの兵士が朔方行營に入ったときである〔第二章(1)略年表〕。トハリスタンにネストリウス派キリスト教徒集団がいた可能性が高いことをふまえれば、朔方行營に入った兵士のなかに吐火羅国の景教徒兵士が存在し、伊斯も含まれていた可能性がある。また、ソグディアナでもサマルカンドに府主教座、ブハラとタシケントに主教座があったとされており〔森安1978：240〕、景教徒ソグド人が相当数いたとみられることから、ソグディアナから唐に來た兵士のなかにも景教徒がいたとしてもおかしくはない。

このように安史の乱で、景教徒の兵士は功績をあげ、その勢力を伸張していったとみられるが、その象徴が長安に建てられた「景教碑」である。「景教碑」は、伊斯が施主となり、景浄が撰述した。おそらく、安史の乱での景教徒の功績をアピールしたのであろう。「景教碑」には、シリア文字と漢字で景教僧侶の名前が刻まれており、その数は七十余りある。僧侶だけでこの数であるから、長安に暮らす在家信者はさらに多くいたことになる。さらに、安史の乱期に西域方面から唐にやってくる、禁軍下に入った兵士の中にも景教徒はいたであろうし、貞元三年に「胡客」を神策軍に取り込んだ際にも、景教徒は含まれていたであろう。そして、景教徒とのつながりが顕著に見られた朔方軍も次第に神策軍の影響下におかれるようになっていくことをふまえるならば、禁軍には相当数の景教徒が取り込まれていたと考えられる。そこで次に石刻史料を用いて、禁軍下の景教徒とみられる例を紹介しておきたい。

27) この点に関しては、張星娘（編注）・朱傑勤（校訂）〔2003：1571-1575〕でも検討がなされている。それによれば、至徳二載（757）に唐が安史の乱鎮圧のために鳳翔に赴かせた安西・西域軍に伊斯は從軍していたとし、そして、同じく鳳翔にいた郭子儀の軍に編入されたとみている。

#### (4) 墓誌・経幢に見える景教徒と宦官・禁軍勢力

近年、唐代の墓誌等の石刻史料が陸続と発見されているが、そのうち、景教徒関連のものは四点存在し（「景教碑」を除く）、これらから、禁軍と景教徒とが何らかの関わりを有していたことを確認できる。

##### a. 李素とその家族（「李素墓誌」「卑失氏夫人墓誌」）

神策軍の景教徒としてまず挙げられるのは、翰林待詔であり、かつ天文・暦を扱う司天臺に奉職した李素（743-817年）の子である李景位（または李景佐）である。李景位は李素の二番目の妻の墓誌「卑失氏夫人墓誌」<sup>28)</sup>によると、「右神策軍散兵馬使兼正将」とあることから、貞元三年に神策軍に「胡客」として編入された可能性が高い。また、榮新江氏は、「李素墓誌」と「卑失氏夫人墓誌」の分析から、李素の家族は景教徒である可能性が高いと指摘した。そして、実際に、「景教碑」に刻まれた漢字僧名の中に、李素の字（あざな）「文貞」が含まれていることが確認されていることから「榮1998（2001：254-257）」、李素は景教徒であり、その家族も景教徒であったとみてよいだろう。

「李素墓誌」<sup>29)</sup>によると、李素は「西国波斯人」であり、「本国王之甥」であるという。また、天宝中に祖父李益が唐に来て、長安の宿衛にとどまったとある。ではここでの「波斯」は何か。先述のように、このとき滅亡しているササン朝ペルシアではありえないので、可能性として考えられるのは、ヤズディギルド三世とその子のペーローズがトハリスタンに逃れ建てようとしたササン朝亡命政権である。ヤズディギルド三世は途中で落命し、ペーローズも最終的には唐朝に亡命するが、その子のナルセスはトハリスタンに戻り、八世紀半ばころまでササン朝の亡命政権は余燼を保っていたという【森安2007B：14-15】。『冊府元龜』巻971（外臣部、朝貢4）によれば、天宝四～十載（745-751）に六回（745年3月、746年7月、747年4・5月、750年4月、751年9月）にわたって波斯国からの使者が来朝していることから、李益はこのいずれかの時に使者に随行して唐に来た可能性があろう<sup>30)</sup>。

李素の妻卑失氏（?～822）は、「李素墓誌」によると貞元八（792）年に李素に嫁いだ。「卑失

28) 『隋唐五代墓誌匯編』陝西4：79；『全唐文補遺』3：186；『唐代墓誌彙編』2072-2073；榮1998（2001：242-243）

29) 『隋唐五代墓誌匯編』陝西4：87；『全唐文補遺』3：179；『唐代墓誌彙編』2039-2040；榮1998（2001：239-242）

30) 榮新江氏は、既にササン朝ペルシアは滅んでおり、国王が正規に派遣することは無理であることから、李益が使者として来朝したというのは疑わしいとし、国王ペーローズに付き従い、唐に亡命した王妃一族の出身とみる【榮1998（2001：244-245）】。

氏夫人墓誌」によれば、卑失氏夫人の「族望」は平盧（營州または青州）であり、家は邠上（邠州）とあるが、その姓「卑失」からみて漠北から入唐した突厥系の人物とみられる〔榮1998（2001：252）〕。卑失氏の父は「朔方節度衙前兵馬使」とあることから、朔方節度使下の北方のトルコ系武人であったとみられる。彼が活躍した時期は、卑失氏の嫁いだ時期などから判断して、代宗～徳宗期の初めであろう。とすれば、卑失氏の父は、「景教碑」の施主でもあった朔方節度副使の伊斯と同僚である可能性が高く、朔方軍管内の景教の流行をふまえれば、景教徒であった可能性も高い。

李素は、『六波羅蜜經』翻訳事業と無関係ではなかった。この点について、彼が任命された「翰林待詔」「司天監」に着目して述べておきたい。李素は、奉職する前、広州別駕に任命された父と広州にいたが、代宗大暦中（766-779）に勅命が下り長安に招かれ、このとき翰林待詔に任命されたとみられる。さらに、司天臺の長官である司天監となるが、貞元八年頃まではこの地位に徐承嗣が就いていることが確認できるので、司天監になったのはこれ以降とみられる。ただし、おそらく司天臺へは、長安に招かれた頃から出入りしていたのであろう。この李素の上司である徐承嗣<sup>31)</sup>は、貞元四（788）年に、『六波羅蜜經』翻訳の最終段階で行なわれた「観訳」に翰林待詔として参加している（第一章(2)b-ii）。『六波羅蜜經』の「観訳」には、徐承嗣を筆頭に翰林待詔が20人参加したとあることから、当時翰林待詔であり、かつ徐承嗣の部下とみられる李素も参加していた可能性が高い<sup>32)</sup>。

#### b. 米継芬とその家族（「米継芬墓誌」）

ソグディアナからやって来た長安在住のソグド人景教徒として、米継芬（713-805年）の家族の例が挙げられよう。「米継芬墓誌」<sup>33)</sup>によると、父の突騎施の代に質子として長安に来た。ちょうどマイムルグは開元十六（728）年四月と同十八（730）年四月に使節を唐に送っており〔『冊府元龜』卷975（外臣部、褒異）：葛2001（2006：237）〕、米継芬は、このとき父と一緒に来た可能性が

31) 徐承嗣は徳宗建中3（782）年に「正元曆」を作成したことで有名であるが〔『新唐書』卷29志第19曆5〕、このとき作成に協力したのが、同じく司天臺の夏官正であり、かつ不空の俗弟子で不空が訳出した『宿曜經』に注釈を施した楊景風であった。このように徐承嗣には、長安仏教界の人物とのつながりがみられる。

32) なお、翰林待詔には、李素だけではなく、第一章(2)b-iiでも述べたように、クチャ出身の利言や、「胡語」を解する智真のような仏僧など中央アジア出身の者がその職に就いており、西方の学問・知識が内廷で必要とされていたことがわかる。

33) 『隋唐五代墓誌匯編』陝西2：25；『全唐文補遺』3：143；『唐代墓誌彙編統集』：796；葛2001（2006：233）

高い。米継芬は禁軍に仕えており、天宝十四載（755）に42歳であることから、安史の乱や僕国懐恩の乱鎮圧で活躍したとみられる。また、墓誌によると「左神策軍故散副将游騎將軍」とあることから、神策軍に入ったことが分かる。また、墓誌には、

…公有二男、長曰国進、任右神威軍散将・寧遠將軍・守京兆府崇仁府折衝都尉同正。幼曰僧思圓、住大秦寺。

とあって、二人の息子がおり、長男国進は、武人として神威軍に送り込まれていることがわかる。神威軍は禁軍中で神策軍に次ぐ地位にあり<sup>34)</sup>、やはり宦官に率いられていた。つまり、国進も米継芬同様に宦官の影響下にあった。そして、次男思圓は長安の大秦寺の僧侶とみられることから、米継芬一家も景教徒とみてよいだろう。

### c. 洛陽出土の景教経幢

洛陽で近年発見された景教経幢からも景教徒と禁軍との関係をうかがうことができる。この景教経幢は、仏教の経幢を模したものとみられ、八面体の石柱で、墳墓前の神道の傍らに立てられたとみられている。石の表面上部には十字架や天使（飛天に近い姿）とみられるレリーフが刻まれ、その下側に、景教經典の『大秦景教宣元至本経』と「大秦景教宣元至本経幢記」（以下「経幢記」とが、各面六行ずつ刻まれている<sup>35)</sup>。下部の欠損により、完全な復元は難しいが、「経幢記」の残存部分から、経幢を立てるまでの経緯（墓地や経幢用の石の購入など）や、墓主や経幢を立てた墓主の親族がある程度明らかとなる。本経幢の発見により、洛陽に大秦寺が実在したことが確認されるとともに、安・米・康の姓をもつ中国在住のソグド人景教徒の存在が明らかとなった。

「経幢記」によると、元和九（814）年十二月八日に洛陽県感徳郷柏仁で墓地を買ったとあるので、墓主の死亡時期は、元和九年頃とみてよいだろう。そして本経幢39行目、つまり「経幢記」の最後の面である第8面1行目冒頭に、「中外親族題字如後」と刻まれ、それに続いて名前が列挙されていることから、これらが墓主の親族であり、墓主のために経幢建立に関わったとみられる。この「経幢記」に基づき、墓主やその親族等を整理すると次のようになる<sup>36)</sup>。

34) 神威軍はその後「天威軍」と名称を改め、最終的に神策軍に吸収された [張1994: 154]

35) 本経幢の基本情報（発掘状況、残存状況、大きさ等）や、経幢が持つ効能等については葛承雍（編）2009に詳しいのでそちらを参照されたい。

36) 「経幢記」にみられる墓主及びその親族等の構成については、羅2007（葛2009: 52-55）、殷・林2008（葛2009: 98-103）、唐2009（葛2009: 152-153）でも検討が加えられているので、これらの成果に基づきつつ、一部私見を交え作成した。なお、本稿で取り上げる経幢記の該当部分を以下に取り上げておく（「/」以下は石が欠落していることを示し、□は文字はあるが判読が困難なもの）。

- ①亡妣安国安氏太夫人：墓主  
 ②亡師伯和：「亡師伯、和…」か、「亡師の伯和」であるのかは、「和」以下の石の欠落により判断できない。  
 ③“承家嗣嫡”：①の息子、④の兄。 經幢を立てた中心人物とみられる。

以下は「中外親族」

- ④弟景僧清素 ⑤従兄少誠 ⑥舅安少連  
 ⑦義叔上都左龍武軍散將兼押衛、寧遠將軍、守左武衛大將軍、置同政（以下欠落）  
 ⑧洛陽大秦寺寺主 法和玄応…俗姓米  
 ⑨（洛陽大秦寺）威儀大德 玄慶…俗姓米  
 ⑩（洛陽大秦寺）九階大德 志通…俗姓康

墓主は①安国安氏太夫人でとみられ、安国（フハラ）出身であることがわかる。おそらく②も共に葬られたとみられるが、いかなる人物であるかは不明である。29行目（第6面3行目）に「承家嗣嫡、恨未展孝誠、奄違庭訓、高堂□（以下欠落）」（家督を継いだ嫡子でありながら、これまで孝行らしきことをしたこともなく、家訓にも背いてきたことを悔やんでいる。父母は…）とあることから、この“承家嗣嫡”（③）が經幢建立の中心人物であり、かつ安氏太夫人の嫡男とみられる。「中外親族」のトップに刻まれている④「弟景僧清素」はおそらく③の弟であることを示しているであろう。③兄が家を継ぎ、④弟は景教の僧侶として出家している。④以外の「中外親族」は、⑤従兄⑥舅⑦義叔であるが、これらも經幢建立に協力したのでであろう。さらに洛陽大秦寺の聖職者の名前（⑧～⑩）が刻まれており、米（マイムルグ）・康（サマルカンド）姓からなるソグド系の人物で、寺主をはじめとする大秦寺の枢要な地位に就いている<sup>37)</sup>。彼らと墓主との具体的な関係は不明である。⑦の“義叔”は、「上都」即ち長安の龍武軍（北衛禁軍の一つ）の散將である。龍

29 承家嗣嫡、恨未展孝誠、奄違庭訓、高堂□／…

30 森沈感因、卑情蓬心、建茲幢記、鏤經刻石用／…

31 尉 亡妣安国安氏太夫人神道及 亡師伯和／…

…（中略）…

38 勅東都右羽林軍押衛、陪戎校尉、守左威衛、汝州梁川府／…

39 中外親族題字如後 弟景僧清素 従兄少誠 舅安少連／…

40 義叔上都左龍武軍散將兼押衛、寧遠將軍、守左武衛大將軍、置同政／…

41 大秦寺 寺主法和玄応俗姓米 威儀大德玄慶俗姓米 九階大德志通俗姓康／…

42 檢校塋及莊家人昌兒 故題記之

37) 葛承擁氏は、本經幢にみえる洛陽大秦寺の寺主が米姓であること、b. でみたま継芬次男も長安の大秦寺に属していること、長安・洛陽の大秦寺は、長安の主教の管轄下にあり、両寺院は密接に結びついていたこと、そして、經幢墓主の卒年が814年頃と米継芬墓誌が805年と時期的に大きな差はないことから、これら両石刻にみえる米氏は長安・洛陽に各々配置された景教徒一族の可能性があると指摘する [葛2009（同編）2009：129]。

武軍は、神策軍同様に宦官の影響下におかれていたことから [張1994: 152; 劉2006: 43-44]、義叔は、景教徒ソグド人であり、かつ宦官の影響下にある人物の可能性<sup>38)</sup>がある。なお、この安氏一族がいつ洛陽に移住してきたのかは不明である。

羅炤氏は、この安氏一族が墓と墓地を護るだけの守墓人（「檢校塋及莊家人」）を雇っていたこと（42行目（第8面4行目））や、経幢の本来の大きさは、その構造から推測すると、全体の高さが3メートル以上にも及ぶ大規模なものであり（現存の経幢の全長は1.1メートル）、経幢のレリーフも極めて精美なことなどから、安氏一族は、それを造らせるだけの財力を有する富裕層であったという [羅2007 (葛 (編) 2009: 53)]。洛陽にソグド系の人々が多く集住していた事実をふまえれば<sup>39)</sup>、そうした財力がソグド人の商業活動に支えられていたことは疑いない。これに加え、一族のうち誰かを宦官配下の禁軍の中に送り込むなどして、巧みに宦官勢力とのコネクションも確保していたことがわかる。

以上のa～cの例から、景教徒は、一族のうち誰かを宦官配下の禁軍に配置させ、その一方で、大秦寺にも一族の誰かを所属させていることがわかる。彼らは、景教徒同士のまとまりを保ちつつ、宦官勢力ともつながりをもつことで、その庇護下で、諸活動を行うというパターンが多かったと推測される。同様のことは仏教徒でもみられ、例えば、いとこ同士の羅好心と般若が、禁軍と仏教界にそれぞれ足場を固め、その両方を統括する宦官の庇護下にあって活動を行ったこととよく似ている。

##### (5) 仏教徒と景教徒による共同翻訳の目的

以上より、安史の乱以降、景教・仏教界、そして、それと密接に結びついている禁軍には、ソグド人・バクトリア人・ペルシア人をはじめとする非漢族の人々が相当数流入していたことがわかる。おそらくはそのピークが「胡客」を神策軍に組み込んだ貞元三（787）年頃であり、『六波羅蜜経』は、まさしくこの時期に訳出されたのである。何故この時期に、羅好心が「胡本」の翻訳を行おうとしたのかについて、これまでの検討をふまえ、筆者なりの結論を導き出すと次のようになる。

当時の神策軍は、中央アジアから唐にやってきた人々を多く取り込んでおり、かれらの宗教

38) なお「経幢記」には、「中外親族」の名前を列挙する直前の38行目に（第7面6行目）、「勅東都右羽林軍押衙、陪戎校尉、守左威衛、汝州梁川府（以下欠落）」という羽林軍の武人が記されている。ただし、残念ながら下部の欠落により、安氏一族との関係は分らない。

39) 洛陽のソグド人については、柴1999B、張2009をはじめとする多くの論考で取り上げられているので、そちらを参照されたい。



的バックグラウンドも様々であった。そのような人々の中にあつて羅好心は、かれらを束ねるリーダー的な存在であった。安史の乱以降、景教徒が勢力を伸ばしてくると、これらをいかにして自派に取り込むかが課題となった。そこで羅好心は「胡本」の『六波羅蜜経』に注目し、景教徒代表の景浄と仏教徒代表の般若に共同で翻訳を行なわせた。仏教僧と景教僧とが「共同」で翻訳事業を実施するという形式をとり、さらにその翻訳経典を皇帝の認可のもとに天下に広めるという一連の「パフォーマンス」こそが、仏教・景教の俗信者を統合する上で重要な役割を果たすと見なしたのであろう。また、精強な禁軍を編成し、軍事力を背景に政治的勢力を維持したい宦官からすれば、景教徒であれ何であれ、彼らの武人としての戦闘能力の高さも魅力的であったはずである。仏教・景教を問わず、協力体制をとって、吐蕃の脅威に対抗していく必要があった。

ここで、梵本の翻訳になるが、「胡人」の統合という観点から、翻訳の実施場所たる西明寺や六波羅蜜経院の勅額を賜わった醴泉寺に着目してみよう。両寺院は、外来商人の行き交う西市の近隣に位置し、祇祠や景教寺院が集中する地域にあった。醴泉寺のある醴泉坊はソグド人の邸宅が最も多くあったとされる坊であり [栄1999B (2001: 82-84)]<sup>40)</sup>、また、唐初には、唐に亡命したササン朝のペーローズによって「波斯胡寺」が建てられるなど、ササン朝の王族とも縁が深かった。こういった立地を選んでいるところをみても、景教・仏教の共同事業は失敗に終わったものの、やはり、この一帯に住む非漢族の人々をうまくまとめようとするねらいがあったことがうかがえる。

一方、景教勢力が仏教勢力と手を結ぼうとした狙いは何であったのか。景教徒が唐内地で生き残っていくには、仏教勢力のように、権力者の庇護下に入ることが最も重要である。後ろ盾でもあった朔方節度使の勢力が朱泚の乱以降次第に衰えつつあったことなども考慮すると、景教徒たちは、宦官・禁軍勢力の傘下に入ることが最善と判断したとみられる。よって、景浄も羅好心の共同翻訳の提案を受け入れたのであろう。しかも、この宦官・禁軍勢力が信奉していたのは主に仏教、とくに不空以来受け継がれてきた護国を前面に押し出した密教で、徳宗の全面的支持を獲得していた。よって、景浄は生き残りをかけて仏教に近づこうとし、『六波羅蜜経』の「翻訳」に協力したのであろう。ただ、残念ながら徳宗は景教と仏教の教えは明確に区別されるべきものとして、彼らの共訳経典の流布を認めなかったため、景教徒と仏教徒とを仏教のもとに統合するという試みは実現されず、梵本に基づき仏教僧侶だけで翻訳を実施するこ

40) 醴泉坊では、サマルカンド特有の「潑胡王乞寒戲」という歌舞が盛大に実施されていたことなどからも(開元元年に禁止)、この辺りにソグド人が多く暮らしていたことがわかる [那波1941: 480-481; 向1957 (2001: 73-78); 小野1987: 18-20]。

とになったのである<sup>41)</sup>。

## おわりに

八世紀半ば、ソグディアナからトハリスタンそしてカーピシーにいたる地域の様々な宗教を奉ずる人々は、東漸するイスラームの圧迫を避け、新天地を求めて東方を目指し、唐にやってきた。宦官勢力は、これらの中央アジア地域の人々や、河北・河西・朔方等の非漢族の人々を、自ら率いる禁軍の下に吸収し、軍事力を強化させた。一方で、これらの移民のなかには、宦官・禁軍勢力と密接に結びついた長安仏教界に吸収されるものもいた。安史の乱以降、宦官・禁軍勢力と長安仏教界とは、長安における非漢族の受け皿となり、その勢力を増していったのである。梵本『六波羅蜜経』翻訳は、当時唐にとっての最大の懸案となっていた吐蕃の脅威に対抗していくために、宦官・禁軍勢力に長安仏教界の勢力が加わった、ひとまとまりの集団によって実施された。僧侶らは、宦官・禁軍勢力の支援の下、護国のための「新兵器」として最新の仏教思想を整備し、物理的な軍事力を有する禁軍と並び、仏教の力で国土守護に努めているのだということを主張したのだろう。

このように、宦官・禁軍勢力は多くの非漢族を吸収し、仏教を紐帯として結びつきつつまとまりを維持していたが、その集団内部には、安史の乱以降勢力を伸張していた景教徒も多く含まれており、その宗教構成は複雑であった。「胡本」に基づく『六波羅蜜経』の翻訳事業は、まさしくこういった宦官・禁軍勢力の集団内部の宗教構成の複合的状況を反映したものであった。禁軍下の非漢族代表の羅好心が施主となって、景教僧代表の景浄と、仏教僧代表の般若との「共同翻訳」を実施させたのは、景教・仏教信者をうまく統合しようとする狙いがあったと考えられる。ただ、そこで完成した経典の天下への流布は、徳宗には認められなかったため、結局、仏教僧侶だけで梵本に基づいて翻訳がなされたのである。

本稿では、長安仏教界を支えた人脈を考察するに際し、宦官が禁軍の軍事力を強化するため、またはその勢力を増大させるために、非漢族を取り込んでいくという、軍事的側面からの分析を主に行なった。しかし、宦官勢力のもとに取り込まれた人々の中にはソグド系・バクトリア系の人々が含まれており、彼らが、武人としてだけでなく「商人」としての顔もあわせ持つこ

---

41) 小野氏は、『六波羅蜜経』巻1には、中央アジア起源の「蘇莫遮」についての説明が記されていることから、『六波羅蜜経』が漢訳される際には、「梵本」だけでなく、「胡本」も利用していた可能性があるとみている [小野1987: 40-41]。本稿では、あくまでも『六波羅蜜経』翻訳に関した人々の分析に的を絞ったため、経典の詳細な分析は行なっていない。漢訳『六波羅蜜経』と「胡本」との関係については今後分析する必要があるだろう。

とに着目すれば、必然的に商業的側面からの分析が必要となってくるはずである<sup>42)</sup>。貞元三年に神策軍下に取り込んだ「胡客」が長安で高利貸し業を行っていた事実や、禁軍下には影庇によって多くの商人が入り込んでいたこと〔高橋：1981〕、などからみても、禁軍と経済活動とが密接にかかわっていることは明白である。つまり、宦官は、ソグド人やバクトリア人を禁軍下に取り込むことで、彼らが広域に展開する商業ネットワークを掌握しようとしていたということは当然想定しなければなるまい。ソグド人らにとっても、禁軍の肩書きをもち、宦官勢力の庇護下に入ることは、唐内地における商業活動をスムーズに行なうことができるというメリットがある。そして、長安の仏教僧侶は、この宦官勢力の庇護下に入り、その配下のソグド人やバクトリア人がもたらす富を背景に、仏教活動を行なうといったことも視野に入れねばならない。こういった経済的な側面を含めた総合的な見地からの検討は次の課題としたい。

#### 【参考文献】

〔日文〕

- 荒川正晴1997「唐帝国とソグド人の交易活動」『東洋史研究』56-3：171-204。  
 稲葉穰2001「安史の乱時に入唐したアラブ兵について」『国際文化研究』5：16-33。  
 ——2004「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』76（2003）：382-313（逆頁）京都。  
 ——2010「八世紀前半のカーブルと中央アジア」『東洋史研究』69-1：174-151（逆頁）。  
 岩崎日出男2002「般若三蔵の在唐初期における活動の実際について——『大乘理趣六波羅蜜經』翻訳と北天竺・迦湿蜜国派遣の考察を中心として——」『高野山大学 密教文化研究所紀要』15：13-27。  
 榮新江2007「唐代の仏・道二教から見た外道—景教徒」『中国宗教文献研究』：427-445。  
 小野勝年1987「大道長安に通ず—醴泉坊と醴泉寺をめぐる—」『東洋史苑』28：1-45。  
 小畑龍雄1959「神策軍の成立」『東洋史研究』18-2：35-56。  
 ——1968「神策軍の発展」『田村博士頌寿東洋史論叢』：205-220。  
 桑山正進1990『カーピシー—ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所。  
 ——1998『慧超往五天竺國傳研究』臨川書店。  
 佐藤圭四郎1981「唐代商業の一考察——高利貸付について——」『イスラーム商業史の研究』（東洋史研究叢刊之三十三）：298-324。  
 佐藤長1959『古代チベット史研究』（下巻）同朋舎。  
 高瀬奈津子2009「『李輔光墓誌』積読」『明大アジア史論集』13：211-223。  
 高橋継男1981「唐後期における商人層の入仕について」『日本文化研究所研究報告』（東北大学日本文化研究所）17：153-173。

42) トゥルファン文書「唐垂拱元（685）年康義羅施等請過所案卷」（64TAM29:17a,95a,108a,107,24,25）によると、外来のソグド商人と吐火羅姓をもつバクトリア商人が西州都督府に過所を請求しており、ソグド人とバクトリア人が共に交易活動を行っていたことが明らかになっている〔荒川1997：179-180〕。また、福島氏は、李誕一族の墓誌の検討を通じ、バクトリア人とソグド人とが通婚関係を結び、かつ連携して交易活動を行っていたと指摘する〔福島2010：48-50〕。このように、ソグド人のみならずバクトリア人の中国内地における交易活動にも注目していく必要がある。

- 塚本善隆1933「唐中期以来の長安の功德使」『東方学報』4、京都：368-406（再録：1975『塚本善隆著作集』第三卷、大東出版社：251-284）。
- 月輪賢隆1971「般若三蔵の翻経に対する批議」『仏典の批判的研究』百事苑：526-539。
- 友永植1994「不空訳『仁王護国般若波羅蜜多経』小考」『別府大学紀要』35：17-28
- 中田美絵2006「唐朝政治史上の『仁王経』翻訳と法会—内廷勢力専権の過程と仏教—」『史学雑誌』115-3：38-63。
- 2007「不空の長安仏教界台頭とソグド人」『東洋学報』89-3：33-65。
- 2010「唐代徳宗期『四十華嚴』翻訳にみる中国仏教の転換—『貞元録』所収「四十華嚴の条」の分析より—」『仏教史学研究』53-1：21-42。
- 那波利貞1941「蘇莫遮攷」『史学論文集 紀元二千六百年記念』京大文学部：447-513。
- 日野開三郎1974『支那中世の軍閥』（東洋文化叢刊）、三省堂（再録：1980『日野開三郎 東洋史学論集（1）』三一書房：24-171）。
- 福島恵2010「厨賓李氏一族攷—シルクロードのバクトリア商人」『史学雑誌』119-2：35-58。
- 藤枝晃1961「敦煌出土の長安宮廷寫経」『塚本博士頌壽記念仏教史学論集』：647-667。
- 藤原崇人2009「契丹（遼）の授戒儀と不空密教」『遼金西夏研究の現在』2、東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所：1-23。
- 前嶋信次1965「安史の乱時代の一二の胡語」『石田博士頌壽記念東洋史論集』石田博士古稀記念事業会：411-423。
- 丸橋充拓2006『唐代北辺財政の研究』岩波書店。
- 森部豊2004「唐末五代の代北におけるソグド系突厥と沙陀」『東洋史研究』62-4：60-93。
- 2008「ソグド系突厥の東遷と河朔三鎮の動静—特に魏博を中心として—」『東西学術研究所紀要』（関西大学）：137-188。
- 2010『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』（関西大学東西学術研究所研究叢刊36）、関西大学出版社。
- 森安孝夫2007A『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史05）、講談社。
- 2007B「唐代における胡と仏教的世界地理」『東洋史研究』66-3：1-33。
- 森安達也1978『キリスト教史Ⅲ』（世界宗教史叢書）東京：山川出版社。
- 吉田豊1994「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報』66（京都）：380-271（逆頁）。
- 1997「ソグド語資料から見たソグド人の活動」『中央ユーラシアの統合』（岩波講座世界歴史11）：227-248。
- 2003「イラン語圏の仏教信仰とイラン語仏典」『論集 原典 古典学の再構築総括班』：217-235。
- 頼富本宏1979『中国密教の研究—般若と贊寧の密教理解を中心として—』大東出版社。
- [中文]
- 村井恭子2009「唐吐蕃回鶻並存時期的西北邊境—以《李良僅墓誌銘》為中心」『文史』2009-4（総89）：133-149。
- 葛承雍2001「唐代長安一個粟特家庭的景教信仰」『歴史研究』2001-3（再録：同著2006『唐韵胡音與外来文明』中華書局：232-241）。
- 2009「西安、洛陽唐兩京出土景教石刻比較研究」『文史哲』2009-2→葛（編）2009：122-133
- 葛承雍（編）2009『景教遺珍—洛陽新出唐代景教經幢研究』文物出版社。
- 何永成1990『唐代神策軍研究—兼論神策軍與中晚唐政局』台湾商務印書館。
- 頼瑞和2003「唐代的翰林待詔和司天臺—關於《李素墓誌》和《卑失氏墓誌》的再考察」『唐研究』9：315-342。

- 李鴻賓1996「論唐代宮廷内外的胡人侍衛—從何文哲墓誌銘談起—」『中央民族大学學報』1996-6：39-44。  
——— 2000『唐朝朔方軍研究』吉林人民出版社。
- 劉琴麗2006『唐代武官選任制度初探』社会科学文獻出版社。
- 羅焯2007「洛陽新出土<大秦景教宣元至本經及幢記>石幢的幾個問題」『世界宗教研究』2007-4→葛（編）2009：34-59。
- 馬小鶴2008『摩尼教与古代西域史研究』北京：中国人民大学出版社。
- 孟楠1993「回紇別称『花門』考」『西北史地』4（総51）：39-43。
- 榮新江1998「一個入仕唐朝的波斯景教家族」『伊朗学在中国論文集』→榮2001：238-257。  
———1999A「『歷代法寶記』中の末曼尼和弥師訶—吐蕃文獻中の摩尼教和景教因素的来歴」『藏学研究叢刊—賢者新宴』北京出版社：130-150→榮2001：343-368。  
———1999B「北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落」『国学研究』6：27-86→榮2001：37-110。  
———2001『中古中国与外来文明』三聯出版社。
- 唐莉2009「洛陽新出土大秦景教經幢文初积及翻譯」→葛（編）2009：134-156。
- 向達1957『唐代長安與西域文明』三聯書店（再版2001、河北教育出版社）。
- 殷小平、林悟殊2008「幢記若干問題考积—唐代洛陽景教經幢研究之二」『中華文史論叢』2008-2→葛（編）2009：92-108。
- 張国剛1994『唐代政治制度研究論集』臺北：文津出版社。
- 張乃翥2009「洛陽景教經幢與唐東都“感德鄉”的胡人聚落」『中原文物』2009-2：98-106。
- 張星烺編注、朱傑勤校訂2003『中西交通史料匯編』3、中華書局。
- [欧文]
- De La Vaissière, Étienne 2005 “Čakar sogdiens en Chine”. In: De La Vaissière / Trombert (ed.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris: 255-260.
- Forte, Antonino 1996 “The Chongfu-si 崇福寺 in Chang’an. A neglected Buddhist Monastery and Nestorianism,” *Paul Pelliot, L’inscription nestorienne de Si-ngan-fou*, edited with supplements by Antonino Forte, Kyoto et Paris: 429-472.
- Weinstein, Stanley 1987 *Buddhism under the Tang*, Cambridge University.

※本稿で使用した『続開元録』及び『貞元録』は、『大正新脩大藏經』卷55所収のものによった。